
BestLife

坂崎紗葵

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BestLife

【Nコード】

N4088Z

【作者名】

坂崎紗葵

【あらすじ】

坂崎たちの「戦い」から14年。

新しい世代の中学生たちは何を思い、生きるのか。

2026年からの新しい物語

転校生

- 2026年4月1日 7時20分 愛知県特別区「フロート島」 -

「起きろ、朝だ」

「あと・・・10分」

「起きろ」

黒鉦悠一、14歳。中学2年生。

起きろと催促している方が。

母親を叩き起こし、自分が朝早く起きて作った弁当と朝食のトーストとサラダを差し出す。

「ありがとー、ゆうちゃん」

「分かったから、早く行け。俺今日から新学期なんだから」

母はぼーっとした顔をし、

「ああ、そうだったわぁ・・・だからお弁当ね」

「わかつたらそのデカイケツどけて仕事にいけ、仕事」

「はい」

母親の世話をして自分は制服を整え、肩掛けカバンを下げる。

青い学生用カバンだ。横に白い字で「柊北部中学校」とある。

2012年5生まれの黒鈍悠一は3度目くらいの転校を体験した。

1度目は父の都合、2度目は父の死、3度目は母の都合。

落ち着いたのは愛知県の知多半島沖に作られた都市、フロートアイランド。

数年前から少子化から人口ピラミッドが変化し、人口が増加し始めた日本。

政府の徳政令による副産物だった。

フロートアイランドは日本政府の政策の一つであった「人工都市」の一つである。

フロートアイランドは別の顔を持つ。

「自衛隊島」

広大な面積には海上自衛隊の港があるためだ。

付近には航空自衛隊のP-1対潜哨戒機を配備する「浮島基地」。

陸上自衛隊は配備されていないが、一部部隊が少しだけ海自の空自の基地に間借りして駐屯している。

「行ってきます」

「行つてらっしゃい」

黒鈍悠一は外へ歩みだした。

白のスニーカーはぎゅっ、ぎゅっ、と地面を踏みしめる。

「新しい学校ねえ・・・」

「ああ、君が転入生の黒鈍悠一くんだね？よろしく、教頭の井ノ原だ。今は始業式中だから少し待っていてくれるかい？君のクラスは・・・ええと、2-1組」

教頭に止められ、20分程度待たされた。

「担任の仁山広則だよ。よろしく。これからクラスへ行こう」

「わかりました」

担任は20代後半といった若い感じで、黒鉦悠一をクラスへと連れていった。

「あー、今学期から転校してきた新しいお友達を紹介するぞー。入ってきて」

ガラガラ、と白色のスチールドアを開けて一歩踏み出した。

「自己紹介を」

俺は白の水性マーカーを手にとって緑色のホワイトボードにキュツ、キュツ、と音を立てながら書いた。(2015年以降、チョークは姿を消し始めた)

「黒鉦悠一です。くろに刃物のなた、でくろせです」

「はい、黒鉦くんに拍手」

パチパチパチパチと拍手がなされ

「じゃあえつと・・・ああ、坂崎さんの隣だ。あそこが君の席だ」

「分かりました」

視線を感じるのには慣れた。

空いているプラスチック製の机と椅子に座り、鞆を横にかけた。

横の女子がちら、ちらと見てくるので

「よろしく、黒鈍です」

「あ、えつと・・・坂崎です。坂崎紗葵」

授業はなく、教科書をもらっただけ。

帰りの会が終わるといつもどおり

「何処の出身なの？」

「何処からきたの！？」

「何処に住んでるの？」

といった質問が投げられ

「アメリカ生まれなんだよ。子供の時に来たから英語は・・・そこ
までうまくないけど」

「東京だよ」

「あー、一応マンションに」

「アメリカ！？帰国子女！？すっげー！」

「東京人羨ましい！」

はあ。

ひと通りの質問に答え、俺は荷物をまとめて鞆に入れた。

下駄箱で通学靴に履き替え、外に出る。

家に帰り、自分でオムライスを作って食べる。

母親は仕事だ。

「はあ・・・ゲームでもやるかなあ」

家庭用ゲーム機にスイッチを入れ、コントローラをもってプレイする。

夕方頃、夕飯の支度をしなければいけないと思った。

「・・・めんどうだな」

ちらりと携帯端末を見るとメールが一件入っていた。

「今夜は遅いから御飯いらないです!」

と、母から。

「・・・お前が作るもんだろーが」

一人で飯作るのも難儀なので夜の5時くらいに近くのコンビニへ出かけた。

春といえど少し冷えるので上着を着て。

「いらっしやいませー」

店に入り、かごを取って弁当をひとつとお茶を取った。

「・・・あれ」

雑誌の陳列コーナーにどうも同級生らしい人がいた。見覚えがあったのだ。

品定めをしているようじゃがんで選んでいる。

「クラスメイトか・・・?」

ちょうどよく読んでいる漫画の単行本の発売日でもあったので近づいて顔を覗いてみた。ああ、横の子だ。

「あれ、坂崎さんじゃない？」

「・・・んえっ・・・？」

向こうは少し驚いた様子で

「あ、ああ・・・黒鈍君だよね・・・？」

「そう、覚えててくれた？」

「う、うん。どうしたの？」

少し慌て気味の彼女。

「いや、夜ご飯をさ。坂崎さんは？」

「ん、漫画が欲しくて。それ」

指を指しているのはちょうど俺も欲しかったミリタリー系の漫画本で

「え、俺もコレ好きなんだよね。趣味合うね」

と、一言。まあ、いつでも買えるし

彼女は漫画本を取ってかごに入れた。かごには他にミルクコーヒーの缶がひとつ。

「じゃあ、また」

「え？」

彼女はきょとんとしていた。

「学校で」

「ああ、うん、学校・・・またね」

彼女は少しはにかんでバイバイと手を振った。

俺はかこの商品をレジに通し、家に戻った。

「・・・坂崎さんとは面識が出来たけど・・・ああ、友人作らねえとな」

目下ソレが目的である。

意外と友人は出来るもので、4日で普通に話せる友達が二人できた。

「黒鉈はなんかスポーツとかやるん？」

「あー、剣道なら出来るよ」

これが広島^{ひろしま}浩二。

「すげーな、俺何もできない」

これが野山剛。

二人はもともと仲が良かったらしく、そこに俺が入った形となる。

給食でもこのメンツなので中はより良い感じた。

「ねえ、黒鉈くん。手伝ってくれない？」

「え、あ、いいよ」

クラス委員長が俺に手伝いを求めた。

吉山桃華という女子で、話に聞くと金持ちのお嬢様だとか。

荷物を持って教卓に置く。

「ありがとうー」

「いいよ、別に」

背は俺よりは低いものの高く、人気はいいはずなのだが

「……黒鉈、あんまし……委員長とは……」

「・・・ああ」

と、友人二人はこの様子だ。

「・・・？」

その理由は、よくわかった。わかってしまった。

授業も本調子を出し始めた5日目、俺は見た。

俺は課題を机に置き忘れたことに気づき、家から制服のまま学校へ戻った。

時刻は午後4時。

部活に入っていない俺はみんなより少しはやく帰宅したので、校内には活動着の生徒が多く残っている。

「何か部活決めなくちゃいけないなあ」

そんな感じに考えていた。

教室まできたときにガラングランと音が聞こえた。

後ろのドアが少し空いている。

人の気配、4人が5人くらいいる感じがしたのでそっと覗いてみた。

「さーきーちゃん、汚いよあ?」

「臭い臭い、お掃除してあげないとね!」

「動くなつてーの」

3人の女子が、一人の女子にゴミ箱の中身をぶちまけていた。

中心にいたのは紛れもなく「吉山桃華」。

いじめている側だった。

周りを囲んでいるのはよく一緒にいる小早川美佐と矢嶋優希。

そして・・・ゴミをかけられているのは坂崎紗葵さんだった。

「あ?なんかいったあ?」

「・・・」

「きこえないー」

「・・・やめて」

「いまやめてっていった？あははは！おかしいおかしい！だってあなたが自分でかぶったのよ？うふふ・・・おかしなやつ」

俺は「俺はここで助けてあげるべきだったのかもしれない。」

だが・・・だけど

言い訳にすぎないが

とても怖かった。

俺は、彼女たちが出ていくのを待った。

最悪だ

男として。

部屋には一人、ぽつんと坂崎さんが立っていた。

肩を小刻みに震わせていた。

「……ツ……ア」

嗚咽を漏らしながら。

彼女はその場にしゃがんだ。

俺は……俺は出来ることをしたかった。

「あ……あの、坂崎さん」

彼女は小刻みに揺れる肩をこっちに向けた。

「……」

「……ごめん。俺は……見てた。見てただけだった」

彼女は目から涙を拭いて

「……いいの、わかってる。わかってるから……誰も心配しなくていいから……」

なぜ、なぜ彼女はそんなことを言うのか？

「俺は……俺は君を助けるためにきたのかもしれないと、少し思っちゃった。だから、今度見かけたら絶対に助ける。だから……だから、少し話さないか？」

転校生（後書き）

えー、HNは紗葵ちゃんからつけました。

この物語は僕がかいていた前の物語とは大きく異なります。紗葵ちゃんはいじめられていませんでしたから。

JapanForceとは接点ガチガチです。ただ、三十何話グダグダ続ける予定ではないので来年か今年には完結する予定です。

また呼んでいただくと幸いです。

ミリ成分は一切ではありませんが、あまりでません。だから・・・
純粹？な恋愛かもしれないです。はい。

反攻作戦

「あ、ありがとう」

「いや・・・俺が入ってればこんなことにならなかったんだし」

俺はゴミをちりとりに入れてゴミ箱に戻す。

「まず・・・なぜ、あんなことになっていたのか教えてもらってもいいかな？」

「・・・去年の8月くらいだったんだけどね・・・私、吉山さんにちょっとぶつかっていたことがあって・・・それから」

「・・・ずっと？」

「・・・うん」

俺は疑問に思った。

「先生とかは・・・？」

「・・・持ち上がりで今の先生が担任だったけど・・・言っても、何もしてくれないの」

「それどういう・・・」

「いうと・・・吉山さんにバレてしまって・・・」

担任は吉山とグル？

「だから 我慢して・・・」

「俺にさつき”わかってるから”って言ったよね？あの意味は？」

彼女は視線を落とし

「・・・まえに、あなたと同じたすけてくれた人が居たの。その子は・・・女の子だった。意志が強くて、かつこよかった」

「それで？」

「・・・ある日、彼女は学校に来なくなった。会いに行ったら・・・彼女は全治1ヶ月の大怪我をした。階段から落ちて」

「ソレはまさかと思うけど・・・」

「吉山さんが突き落とした、の」

ああ、クソ。なんだと？突き落とした？

「だから、あなたは私に構わなくていいから。後2年・・・だし」

「わかってないな。いじめは屈するものじゃない。抗うものなんだよ」

「抗う？」

「抵抗するって意味。俺のお父さん・・・今は死んだんだけどさ、よくいってたんだよ」

「でも・・・」

彼女はすごく、悪そうな顔をした。

心底やめて欲しいという顔を。

それには俺に対する心配ももっていた。

「助けるよ」

その後、送っていかうかといったが断られたので俺は家に帰った。

「おかえりー、学校どう？」

「んー、思ってたよりも悪いかなあ」

「まあ、いじめられたらぶん殴ってしつけちゃいなさいよ、お父さんも言ってたでしょ？」

「うん、わかってる」

母の仕事はよく知らないのだが、帰りが遅い。

今日はおそらく出勤さえしてないはずだ。

「飯は？」

「食べた」

「いや、夜ご飯。俺の」

母はきょとんとして

「え、作らないとダメ？」

はあ

結局、冷蔵庫のもので簡単に飯を作りソレを出した。

「ゆうくんのおいしいわぁ」

「そらどーも」

「お父さんゆずりね、きっと。私に似ないで正解！」

「バカか」

なんなんだろう？

あの男の子は、私を心配してくれる。

親切心？勇気？

真弓ちゃんを私は大怪我させてしまった。

彼女は転校した

私は彼、黒鉈くんを同じ目に合わせちゃうのではないか？

それだけが、すごく心配だった。

坂崎紗葵、14歳。

家は中流階級位だと思う。

お父さんは陸上自衛隊の特殊調査班という部隊に所属している。

勤務先は浮島基地で、そこで仕事をしている。

お母さんは至って普通、ただ若い。

みんなのお母さんは40歳くらいだけど、私のお母さんは34歳で私を20で生んでいる。

私は平凡に生きてきた。

別に恋愛をしたわけではなく、別に目立ってたこともない。

いわば陰キャラ。そう言っても過言じゃないと思う。

これからもそう生きていくつもりだった。

おかあさんと同じように？そんな感じかもしれない。

私は、いじめに屈してしまっただろう。

私は、私が思ってる以上に強くない。

強くない。

私は

つよくない

「よーっす、おはよう」

「おはよう」

野山が登校途中の俺に挨拶をしてきた。

「今日はさみいなあ」

「ん、ああ」

「どうした、反応悪いぞ」

俺は聞いて見ることにした

「お前、昨日委員長に関わるなって言ったよな？」

「ん・・・ああ・・・それはさ」

「坂崎さんがいじめられてるの知ってるんだろ？」

野山は目を見開いて

「・・・見たのか？」

「ああ、見た。助けることが出来なかったことを悔やんだ」

「・・・彼女、坂崎さんには悪いが・・・関わるだけ間違いだ」

「なぜだ？」

「・・・俺の口からは言いたくない」

「そう・・・か」

「・・・」

同じ内容を広島に話してみた。

「お前は・・・妹を・・・」

「？」

「俺の妹は・・・坂崎を助けようとしてダメになった」

「・・・まさか前助けようとした？」

広島はこくりと頷き

「真弓は正義感のある妹だった。それで坂崎を助けようとしたんだ。そうしたら・・・骨折だよ。親は警察へ訴えようとしたが脅迫文が届いたんだ。それで示談という形で黙らざるを得なかった。」

真弓は強制的に転校させられたよ・・・」

吉山桃華とは何物なんだ？

「吉山桃華は地元の議員の孫娘らしくて、金持ちなんだよ」

「坂崎さんさあ、あんたさあホントウザいんだよね」

「まじうざいんだけど。学校来ないでくれる？」

朝から小早川美佐と矢嶋優希は坂崎に言い寄っていた。

周りは全員重く、ふたりだけ和気あいあいと言い寄っていた。

「ちよつとどきなよ」

小早川は坂崎を押しつけて通学鞆を奪い取って窓から外へ投げ捨てた。

「ちよつ・・・」

「ほーむらーん！ミサミサスッゴォーイ！」

矢島の合いの手で得意げになった小早川は次に

「坂崎さんさあ、ケータイなんて持ってたよね？ゼータク！」

この時代、携帯電話は小学生にまで普及しているので贅沢ではないのだが

「ぼっしゅーです」

小早川は坂崎の手を抑えてポケットから携帯電話を取り出してゴミ箱へ投げ入れた。

「すたらーいくー！」

矢島は合いの手を繰り出し、きゃっきゃきゃっきゃとバカのように喜ぶ。

「やめてよ・・・もう・・・」

「やめてえ？私たちはあなたのためにやってるのよお？」

「あれ、あんたたちあさからおもしろそーにしてるねえ」

「あ、モモ。そうそう、私達遊んであげてるの」

吉山桃華はブランドの通学鞆を机において近寄ってきた。

「トイレ行かない？」 みんなで」

「いいよ、さんせー！」

「いこー！」

坂崎は強引に手を引っ張られて連れていかれそうになる

「やめてよ・・・！」

少し強く

「・・・はあ？あんた立場わかってんの？」

吉山は思い切りグーで坂崎の顔を殴った。顔にかけていた坂崎の黒縁の眼鏡がすっ飛ぶ。

「・・・つがアー！！」

「あんたホントムカつく。殺す。死ね。死ね」

ばこんばこん倒れる坂崎の腹にけりを入れる

「ちよっ、モモ！やめなつて！さすがにやりすぎ！」

「死んだらどーすんの！？」

焦る腰巾着に

「いいじゃん、死んでも私がなかった事にできるんだからさ」

ガラガラ、とスチールドアが開く。

「・・・」

「あ、おはよう黒鉈くん」

吉山桃華は坂崎から離れて満面の笑みで黒鉈に挨拶をした。

「・・・これ、外に落ちてたんだけど」

黒鉈が差し出したのは坂崎の通学カバンだった。

「あっ・・・それ私の・・・」

「さっきすっかり落としたのよ、ねえ坂崎さん？」

小早川は坂崎を立たせ、後ろから背中をつねる

「・・・っ・・・うん」

黒鉈は大きくため息をつき

「はい、次は落とさのようにね」

と、優しく手渡す。

そして落ちていたメガネを拾って

「これも」

黒鉈は内心想っていた。

この3人は駄目だ。腐りきってる。

「であるから・・・じゃあ、黒鉈。答えてみなさい」

「え、はい。ええと・・・ $Y = 4X + 2$ です」

「正解です。座ってよし」

「はい」

俺は椅子に座って普通に教科書の次の問題を解いた。

「ね、ねえ黒鉈くん」

すると隣の坂崎さんが

「さつきは、ありがと。それと一つ聞きたいんだけど」

「何？」

「その問題、すごく難しくてさ・・・教えてくれない？」

・・・基礎だぞこれ

どうも坂崎さんは勉強が苦手らしく、1年生でかなり遅れをとって
いたらしい。

とりあえずソレを導くに至る計算方法を教えて、納得させた。

「なあ、黒錠。お前結構頭いいのか？」

「え？」

「さつきスラスラと答えちゃったじゃん」

野山の言葉にまた驚かされた。

「基礎だろ？あれ」

「え、あれ応用だぞ」

マジか

「この場合のThisは何を指していますか？では・・・黒鈍くん」

「はい、この場合のThisは車です」

「正解です」

するとまた坂崎さんが聞いてきたのでしっかりと教える。

「お前あのあとまた解いてたな。前の学校の順位いくつよ？」

「え、中位だったぞ」

「どんだけレベルたけーんだ」

広島は少し引きつつ

「お前不得意科目何？」

「不得意？・・・あー、数学の図形。全部ダメなんだよ」

「ああ、わかるわかる」

午前の授業が終わり、給食。

今日のメニューはソフト麺に肉味噌。

「これがほんとうまいんだよ・・・あれ？黒鮫？食わないの？」

「え、あいや、味噌ほんとに多いなって」

味噌はあまり食べないからなあ

すると坂崎さんが

「味噌はおいしいんだよ、黒鮫くん。食べてみなつて」

俺はソフト麺をプラスチックの再利用可能箸で4分割し（野山直伝）
、1つを皿に入れてかき混ぜる。

「頂きます」

麺をすすり、口に運ぶ。

「うま・・・」

一斉に坂崎さん、野山、広島の順に

「でしょう？」

「だろ！」

「味噌最高！」

すると横で

「音立てて食べると服にシミが付くから、いらないわ、こんなもの」

と、吉山桃華が箸をほつり投げ、鞆からサンドイッチを出して食べ始めた。

担任は一瞬見て「めんどうだ」という顔をしただけだった。

食器を片付け、残飯を寸胴に入れて運ぶ。

給食残飯は家畜へ配給されるらしい。

午後の授業は国語で小論文を読んだ。

その後の理科も実験で難なくこなした。

「さきちゃん、そーじ、しといてね」

「ばいばあーい」

「さーて、あそぼあそぼー！」

廊下では箒を坂崎が押し付けられていた。

「……ッ」

齒を噛み締める。

我慢、我慢と自分に念を込めた。

ブルブルと筭が震える。

「待てよ、委員長」

「……あ？」

黒蛇は思い切って出た。

「一人に掃除させるとはちょっとおかしくない？」

「……いいのよ、紗葵さんが進んでやるって言ってくれてるから」

「そうなの？坂崎さん」

坂崎はうつむいたまま、小さく首を振った。

「……あの糞女……」

小さく吉山は悪態をつき

「……あんたさあ、あんましあたしと紗葵の間入ると」

ツカツカツカと歩いてきて

「死んじゃうぞ」

ゾクゾクゾクッ！！！

黒鉈はその不気味な声に背筋を凍らせた。

「・・・ご忠告、ども」

結果、3人は帰り黒鉈が掃除を手伝った。

「いいのに・・・」

「いいから」

黒鉈はささつとゴミをちりとりに入れてゴミ箱へ

「ありがとう・・・」

「・・・俺はまけないよ。あのバカには」

「パパあ、聞いてよ！私いじめられたの！」

「なにい！？いじめられたア！？どこの馬の骨にだ！？」

「黒鉈ってゆー転校生！私のこと馬鹿呼ばわりしたんだよ！ひどくなあい！？」

「許せん・・・ああ、私だ。娘の中学に転校してきた黒鉈ってガキを洗い出せ。今すぐに！」

携帯電話を切った男の胸には防衛記念章と階級をしめす位置には一等陸佐のバッジがあった。

「・・・ああ、つけられてる」

黒鉈は直感的に感じた。帰宅道で。

後ろからついてくる。

少し走って路地へ入り、やり過ごす。

目の前をスーツの男が走って行き、あたりを見回す。

「おじさん、誰探してるの？」

男はぎよつとし

「・・・お前だよ」

と。

「俺？」

「そう、お前だクソボーズ。痛い目見てもらっからな」

男は見え見えの技で黒蛇に挑んだ。

黒蛇は軽く受け流し、通りへ走り出た。

男はバカでついてきた。

「交番は　　むこうか」

運良く交番まで導いた。

「おまわりさん！変なやつが追ってきます！」

「しまっ・・・！」

男は自分が誘導されたのに気づいた。

警官は走って

黒蛇を捕まえた

「・・・え？」

「坊や、悪いけどね・・・」

警官は思い切り右ストレートをいれようとし、黒鉈は身を振って交わす。

「ああくそ、グルってことか」

黒鉈はまず、走った

「あ、クソこの待て！」

「待てと言われて待つか！」

黒鉈は警官と黒服の男に追われた。

そして一度身を隠す。

先ほどと同じ手で。

警官と男は走りすぎ、黒鉈を見失った。

「ただいま・・・っ」と

ドアを開けると母親が先ほどの警官と居た。

「そう、この子だ。捕まえたぞ」

そう言つて警官が黒錠に向いた途端

ばこん、といい音がして警官が倒れた。

「変な虫繼いてたわねー、あんた。なんかしたの？」

母親の懇親の一撃で警官は気絶した。

「いや・・・でもなんで殴つたの？」

「偽警官よ、コイツ」

「え？」

「バッジの登録番号の配置とかぜんぜん違つんだもん」

警官はその後、本物の警察官に連れていかれた。

翌朝、いつもどおりの登校。

「ふああ・・・」

ゲームやりすぎだな。

ねむてえ

「おはよう、黒鉈」

「おつす・・・野山」

「どつた？眠そうだな」

黒鉈はあくびをしながら

「オンラインゲームしすぎた」

「程々にな」

「で・・・あつて明治維新は成功したのです。さて、明治維新の後・
・・・」

社会科教師のいうままノートを書き取る。

すると坂崎さんが四苦八苦してる様子だったので

「あとで見せてあげるから」

と、言っておいた。

「え？あ、ありがとう」

ノートを貸してあげて、書き取り終わったらでいいとっておいた。

「それだけはダメッ！」

「はいはい、ぼっしゅー！」

腰巾着二人が羽交い絞めにし、吉山は黒蛇のノートを奪い取った。

「はい、ウォーターシュート！」

ばしゃあっ！

バケツにおもいきりノートが浸かった。

「びっしょびしょじゃあ紗葵ちゃんもびしょ濡れにしないとね！」

「いやっ！やめ……」

「あれ……」

ノートはすべての授業が終わった後に返すと坂崎さんは言っていた

ので、俺は待っていた。

「まさか」

少し走ったら見つけた。

水でふやけたノートと水で濡れた坂崎さんを

ああ、なんて・・・クソ

「坂崎さん！」

近寄ると坂崎さんは目を腫らして

「ごめんなさい・・・これ・・・」

ノートは俺のノートだった。

「そ、それより坂崎さん風邪引くって！こっち来て！」

教室に連れていき、日の当たる窓側に椅子を持って行って座らせる。

「大丈夫・・・髪の毛だけだから」

バケツの水は坂崎が避けたので髪と上着を濡らすにとどまった。

「これ着て。俺保健室からタオル借りてくるわ」

黒鉈はさつと学ランを脱いで坂崎にかける

「あ．．．ありがとう」

「．．．暖かい」

男の子の制服暖かいなあ．．．

坂崎紗葵はぬくもりを感じながら、机の上に突っ伏した。

「持ってきた」

教室にはすやすやと眠る坂崎さんがいた。

「．．．ふう」

俺はタオルを坂崎さんに渡すため。肩を揺すって起こした。

「ん．．．」

「起きた？はい、タオル」

「あつ．．．ありがとう」

ゴシゴシと頭を拭く坂崎さんを見ながら

「風邪引かないといいけど」

「ありがと・・・それよりごめんね？制服濡らしてるし、ノートも」

「いや、ノート移し終わった？」

「え？あ、うん」

「じゃあ今度見せてよ」

俺の提案に

「う、うん。いいよ。もちろん」

「はい、ありがと」

「気にしないで。がんばろう」

俺は少ししっとりした学ランを受け取って羽織った。

「じゃあ、また明日」

「うん、ありがとうね」

俺はそう言ってわかれた。

「うつわー・・・良い匂いするぞこれ」

制服からはほのかに、女の子の匂いがしていた。

「・・・はあ」

「ただいまって・・・誰も居ねえか」

母親は今日も残業らしく、息子の帰りを待つものはなかった。

「まあいいや」

「ホントムカつく」

茶髪に染め上げた頭にツインテールの吉山桃華はシャープペンシルの芯をバキバキと折っていた。

「・・・殺す」

バキン、と10本の芯が割れた。

「あ、そういえば坂崎さん」

「ひゃい!？」

え、と黒蛇は思った。

予想外に驚かれた。

「え、えと、さ、携帯のアドレス交換してなかったよね?しょうよ」

さつと黒蛇は赤外線送信の用意をした。

「あ、う、うんいいよ」

ドギマギしながら坂崎は携帯を取り出して受信モードへ。

「・・・つと。こつちも来たよ」

「登録しておいていいの？」

「?しないと交換した意味無いじゃん」

「そ、そうだね、うん!うん!」

坂崎は、胸の奥がこう、言い知れない感じに傾き、変化するのがわかった。

なんだろう、全くわからない。

その日もまた吉山と腰巾着に囲まれた。

「体操服にお絵かき」

水性マジックではあったが、クラス番号の上に思い切り「死ね」「ブス」「キモイ」と書かれ、机にも。

「綺麗にかけたね、ミサミサ」

ソレの行為を見ていたのは黒鉈だけではなかった。

黒鉈が動こうとした途端

「あなた達、陰湿よ。止めなさい」

「・・・あ？」

新任教師、飯島真衣は英語科の教師で今日は休んでいるいつもの先生の代わりに来ていた、いわばこの件関しては「部外者」だった。

吉山は顔をひん曲げ

「あんた、誰に楯突いてんのぉ？え？」

「私は先生よ。早く授業の用意しなさい」

黒蛇は少しの望みをかけてこの22歳の新人新米新任の教師を頼ることにした。

「やはりいじめなの？」

「はい。でも学校側は認知しようとしません」

飯島は正義感の強い教師だった。新任だったからだろうか。

「・・・わかった。でも・・・認知しないなら上に言っても消えちゃうのよね？」

「はい」

「任せて」

飯島はその日の深夜、インターネットの大規模掲示板にある書き込みをした。

- 学校がいじめを隠蔽してるんだけど -

- 証拠うつp -

飯島は落書きされた体操服と机の写真をアップした

- おいこれ -

- m j k -

- ガチ？学校名希望 -

- 日本発の浮島にある中学校 -

- 遠まわしだが把握。1校しか無いな -

- 電凸しますた -

- 切られたOrz -

- 鬼女にも知らせる -

翌日からこの書き込みはいろいろな掲示板へ蔓延した。

学校側、県庁、市庁舎、教育委員会への電話抗議が多発。

マスコミまでもがこのネタを取り上げた。

そして生徒も、ネットへ詳しい情報をアップした。これは黒鉈や坂崎ではない人物だ。

- 俺同級生なんだが、前にいじめられている子を助けようとした女子が原因不明の大怪我と転校したぜ -

- 被害者女子生徒特定 -

- 加害者は殺人未遂？ -

- 加害者生徒は県議会議員の孫娘。親も公務員 -

- m j k w w w w -

- 国の腐敗 w w w w -

- もしかして吉山聡一？県会議員の。前から不正が有名 -

- G J ! -

飯島の書き込みから2日、吉山桃華の実家へは多数の抗議電話が入り始めた。

そして、吉山桃華は「行動」にうつった。

反攻作戦（後書き）

BESTLIFEの1章は少し短めです。後数話で終わる予定です。

事件（前書き）

改定しました。4が短すぎたんで。

事件

- 午後2時00 陸上自衛隊分屯地 -

「本日はA H - 1 Zヴァイパー、A O H - 1 サムライ落成式典と陸上自衛隊浮島分屯地設営にお集まりいただきありがとうございます」

日本国陸上自衛隊はA H - 6 4 D のA H - X 選定を数十年も前に破棄していた。

以後、A H - 1 S と数機納入されたA H - 6 4 D が戦闘攻撃ヘリの座を守っていたのだ。

防衛省はA H - 1 Z ヴァイパー攻撃機の納入を決定した。

同時にO H - 1 ニンジャの攻撃機型、A O H - 1 サムライの納入を決定した。

A H - 1 Z が高性能機の位置づけで、A O H - 1 がソレを補う形となる。

A O H - 1 はA H - 1 Z よりも安く生産でき、O H - 1 も台湾へ納入されるなどして海外からも武装機型を切望されていた。

武装は国産20? チェーリングガン1門、スタブウィングを延長してハイドラ70 ロケット弾を積めるポッドを2門にA G M - 1 1 4 ヘルファイア2門。

そしてスタブウィング自体に国産のS A M - 2 (短射程空対空ミサ

イル）を搭載した。

OH-1時代は2発装填箱型発射機だったが、これを露出化して武装強化した。

台湾陸軍はこれを切望、日本との同時契約を望んだ。

2017年に日台平和条約が結ばれて以来、2国は確実な防衛ラインを築いてきた。

中華人民共和国連邦（以降PRCS）は幾度となく台湾併合を軍事力によって挑んできたがその強大な日本製と米国製兵器によって阻まれてきた。

「ええー、では基地司令である吉山純太1等陸佐に演説をお願いいたします」

「けっ」

「坂崎3等陸佐、聞こえますよ」

SSF運営人員である坂崎修一3等陸佐は部下でありSSF現地指揮官の石塚2等陸尉になだめられた。

「気に入らん。強姦男がなんで基地司令だ」

「奥さんが彼に強姦されかけたのはぞんじてますが・・・まあ、確

かに彼の知識力は疑いますがね」

石塚はため息を付き

「驚きましたよ。自動小銃をすべて撤廃するって。PRCSに金でももらってんのかな」

「まあ・・・なんだ?・・・早く失脚か転勤して欲しい」

吉山純太が演説台に上がろうとした時、側近が駆け寄ってきて耳打ちをして血相を変えて走りだした

「なんだあ?」

そして坂崎にも新人SSF隊員石尾2等陸曹が駆け寄った。

「班長、緊急のお電話です」

「?」

「娘さんが学校の屋上から転落したとかって、奥様が」

- 4時間前 -

「えー、飯島先生は本日自主退職された」

飯島は県教育委員会へかけられた圧力によってやめさせられた。

黒蛇は自分の行動を恨んだ。

脈絡の無い行動をすべきではなかったと。

給食後、黒蛇は教室を離れてトイレに向かった。

その隙に吉山桃華は動いた。

「来なよ」

腰巾着達は坂崎を引っ張って連れていった。

吉山は部屋を出る際にある人物に

「アイツ来たら、階段で突き落として」

「・・・わかった」

「・・・まずった。広島、アイツら何処に連れてった？」

広島は牛乳を飲むのをやめ

「外に行つたぞ。気を付けろよ」

「あんでしょ？あんたが飯島に言ったんでしょ？パパに迷惑かけてさ、マジ死んで？死ねよ。死ねよぉ！！」

ドン、ドンと坂崎の胸を突き屋上から欄干部分まで押していく吉山。

「いやっ、やつ！」

力は背の高い吉山のほうが上、バスケットボール部の吉山と文化部の坂崎では歴然だった。

黒鉈は廊下で別のクラスの男子と話していた野山に一行がどこへ行ったか聞いて階段を駆け上がっていた。

踊り場でドンッと押された。

「え」

ドン、ドンドン！と勢い良く転がり落ちていく黒鉈。

「がアッ……」

場所は屋上から4Fにかけの踊り場、4Fは理科室や視聴覚室で誰もいない。

「ッ……」

「うわ!？」

黒鉈が目覚めた、と言つかすぐに起き上がったのを驚いた人間がいた。

「……おう、担任かよ」

仁山広則は黒鉈を押した位置から動いていなかった。

「クソ……!」

仁山は上から走り降りてきた

「猪突猛進は馬鹿だ」

走ってきた仁山の足を蹴った。

「うがつ!？」

その場で空中一回転、踊り場に頭からたたきつけられた。

「ッ……」

後頭部が痛い。

黒鉈が痛い部分をさするとヌルツとした感触があった。

「ッ……」

手は赤く染まっていた。

屋上に行こうと力を体に込めた時、屋上のドアが乱雑に空いた。

「ヤッバ、あんなの関わってられない！」

「牢屋なんか嫌だよ!!」

吉山桃華の腰巾着二人は物騒なことを言いながら仁山を踏みつけて階段を降りていった。

「死ねエ……!!!!」

「が……あ……っ……!!」

欄干で坂崎は首を閉められ、ズリズリと欄外へ体がせり出していく。

「落ちろオ……!!! あんたが死んでも誰も気にしないわよッ……!!」

息ができない坂崎は足で必死にもがくが、空を切るだけだ。

「たず……けっ……黒鈍……く……」

「アイツなら死んだんじゃない!? 仁山が階段から突き落としたか

「・・・ああああ!!」

吉山は自分がやったことに恐怖し、階段をかけ降りていった。

「ッ・・・軽いから良かった・・・!」

だが、そう言いつつも坂崎と黒鉈の手はドンドン取れそうになる。

「黒鉈くんも落ちちゃうよ!・・・離していいからっ・・・」

「嫌だね・・・」

ぐぐつと、黒鉈も欄外へ体を持っていかれそうになる。

力がでない。

頭部に負った傷により体力を著しく損耗した黒鉈には坂崎の平均より大幅に軽い体重も重荷だった。

「なんでっ!?なんでそこまでのっ!」

「心配だからだよッ・・・」

「え・・・」

「心配だつて!」

だがこの黒鉈の心配には「愛情」は今のところこれっぽっちもなか

った。

どちらかと言うと妹を思うような感じ。

「ッ・・・」

ズリッ、と手が離れそうになる。

「本当に・・・いいから」

黒鉈は力を込めて、自分の体をのけぞらせるように引っ張った。

勢いで坂崎は欄干を越え、ゴロゴロ屋上を転がった。

黒鉈は勢いで後頭部を激しく地面に打ち付けた。

「うがつ・・・!」

1台は黒塗りのハイヤー、もう1台は高機動車。

学校にそのいかつい車2台が到達した。

「娘は、娘はっ!」

ハイヤーから降りたのは吉山1等陸佐。

彼は警察官に詰め寄る。

「吉山桃華さんのお父さんですか？」

「そうだ、娘は！」

「こちらです」

坂崎3等陸佐は冷静に別の警察官に

「坂崎紗葵は、何処にいるんでしょうか」

「ああ、こちらです。どうぞ」

吉山純太は娘が警察官に囲まれているのに激怒した。

「うちの娘は犯罪者じゃないッ！」

「パパア！」

警察官が彼を制止し

「お待ちください。娘さんは同級生を欄干から突き落とした容疑があるんです」

「お父さん……」

「あれ、紗葵・・・落ちたんじゃ」

「・・・ううん」

「？」

黒鉦は一時的に脳震盪を起こしたが問題はなくその前に負った傷も浅く、校医が処置した。

後日、3人の親による弁護士を同席させた話し合いが行われることになった。

「傷浅いし私気にしないけどね？」

「それでも母親かよ・・・」

黒鉦は母親と話し合いの場に訪れた。

坂崎修一は娘を助けた少年を先に見つけたため、挨拶をした。そして母親らしき人物を見たので挨拶をする。

「ああ、この度は娘をたすけてくれてありがとう。父親の坂崎修一です。あ、お母さんですね？私は・・・」

黒鉦の母は目をぱちくりさせ

「・・・坂崎くんじゃん!？」

坂崎修一は君付けで呼ばれたことに驚き、下げていた頭を戻した。

「ッああ！？里中先輩ッ！？」

黒鉈美紀

彼女は赤坂俊也が行方不明になった後に自分のもとの里中に苗字を戻したのだが親の離婚で母親の旧姓「黒鉈」になっていた。

「え、じゃあウチの馬鹿息子が助けたのは坂崎くんと、離婚してなきや凜ちゃんの子！？」

「してませんよ！ええ！？！？！！」

自分の母が何をしているかさえない悠一は、同じくなぜ父が黒鉈の母を知っているのかわからない先と共に首をかしげた。

「お母さんの元同僚」

「俺の元上司」

互いに子に説明をした二人は

「いや、でも会うとは。凜が喜びますよ、先輩」

「こんな形でね」

雑談に花がさいた。

「私は今、知つての通り防衛省技術研究所にいるのよ。今度は自分の担当する設備が浮島で本格採用されるから来たの」

「じゃあまた移動を？」

「いえ、息子が大学を終わるまでは居るつもり」

坂崎修一は

「何を作ったんです？」

美紀は答えた。

「SSFにも採用されると思うけど、新式の移動用小型潜水艇。私が必要だったこと言うと現場の声が必要だったらしくてね」

「へエ・・・！」

坂崎はそういえば今年度納入分にそんな装備があつたなと思った。

このあたりで弁護士が現れて加害者側、吉山が現れた。

「・・・坂崎3等陸佐、上官命令だ。不問にしろ」

「それはできませんね、吉山1等陸佐。しかも民間人にけが人が出てます」

「ふん、調べているぞ。その女は技術研究所のやつだ。俺が言えばクビが飛ぶようなところのな」

美紀は

「それはそれは。でもネットに先生がばらまいた事実は消えませんかよ」

「・・・く」

飯島の案件は完全にバレ、さらに飯島が今回の事件をすべてリークした。

担任の殺人未遂、吉山桃華の殺人未遂。そして吉山家の実態。

「・・・金ならいくらでもだすというんだ!」

「お前、ホント自分の親父似だな?」

「なん・・・だと?」

坂崎修一は低い声で

「・・・紗葵、黒鉦くんと外へ」

「・・・うん、わかった」

二人は席を外すが、桃華はそのままだ。

「教えてやろう嬢ちゃん。君の親父は16年くらい前に私の妻、つまり君が殺そうとした紗葵の母親に」

「おいっ！？娘の前でそれ以上ッ！？」

「強姦、つまるところ襲おうとした」

「ッ！？！！！！」

桃華は激しく動揺した。

「ソレを解決したのは君のおじいちゃんだ。彼もまた今の君の父のように金で解決しようとした。な？」

弁護士はてきばきと書きとめた。

「君も、君の親も屑だ」

結局、吉山桃華は転校した。

腰巾着達はクラスでも完全に孤立して不登校になった。

紗葵は、家でベッドに座って考えていた。

（黒鉈くんのが頭を離れない。なんで？どうして・・・おかしくなっちゃったのかな・・・私）

メールが入るたびに、胸が高鳴る。

・明日もがんばろうな！・

それだけの、それだけでも

「・・・好きになってる・・・」

「ふー」

黒鉈は息抜きに授業後、図書室へ行こうと思った。

あの事件以来坂崎さんとは絡みがなくなった。メールも時々だ。

席替えて離れたことも理由だろう。

ソレに話そうとすると避けられる。

図書室のカウンターには坂崎さんが座っていた。

「あ……あれ？黒鉦くん」

「あれ、当番？」

坂崎さんはコクリと頷いた。

「そ、つか」

黒鉦はツカツカと歩いて目的の本を探した。

なんできたの……胸の高鳴り止まらないんだけど……

「ああ……やっぱり好きなんだ」

確信した。

本で読んだことがある。

私は忘れようと頭を振り払って本を読みはじめた。

奇遇にも恋愛小説だったが。

「ん……ああ、もう5時じゃん」

本には集中するタイプで、読み終わると当たりは薄暗かった。

夕闇といった感じに薄明るいオレンジの光が指している。

カウンターを見ると、本に突っ伏した坂崎さんが居た。

「起きて」

ゆさり、ゆさりと体を揺するたびに良い匂いがするのは仕方ない。

「ん・・・あ、くくくく黒鈍くーきゃああ！」

椅子がガタンと倒れる。

黒鈍はさつと、坂崎を支える。

「大丈夫？」

「う、うん」

はあ！！！！ドキドキする！ヤバイよお！！！！？

坂崎は胸の高鳴りを抑えつつ

黒鈍と帰路についた。

勉強はやはりうまく行かなかった。

中学2年3学期期末テストも結果は悪く、最悪だった。

いつの間にか軽く一年は過ぎてしまい、中学3年になっていた。

「進路・・・かあ」

坂崎は一人ため息を付いた。

「紗葵、ため息？」

「魅^み来か・・・うん、進路がさ」

「あー、あんた馬鹿だもんね」

新垣魅来は速球ストレートに言った。

「はあ・・・」

黒鉦くんとは同じクラスだった。

だが、彼も男友達と話しているために話す機会もなかった。

メールが週に数回。

でも、片思いは続いていた。

「誰かに、聞いたら？」

「なにを？」

「勉強方法」

そうか、黒鉈くんに聞けばいいか！

「ありがと、魅来」

「え？あ、うん」

早速、夜に電話を試してみた。

「もしもし？」

「もしもし、ええと坂崎です」

「ああ、坂崎さん？久しぶりに声を聞いたよ。話しかけてくれていいのに」

「えっ、そうなの？」

「別に気にしないよ。ええと、ソレで要件は？」

「勉強を教えて欲しいの」

「んー、確かに去年は教えられなかったねあまり。んじゃあうちでやる？」

「え」

「おじゃま・・・しまーす」

黒鉈の家は至ってシンプルだった。

「親居ないから、まあ適当に」

「いいいい、居ない!？」

「あー、いや!別に襲ったりしないし!」

して欲しいけど・・・って何考えてる私。

「じゃあここから・・・」

6月10日、この日から私と黒鉈くんによる勉強会は始まった。

成果は著しく出た。

7月の期末試験、210人中190位だった私の順位は100位まで登った。

「100位?そりゃすごい!」

電話口で黒錠くんが褒めてくれた。

すごく、嬉しかった

「黒錠くんは？」

「ああ、ええと一応20位」

「すご・・・」

「すぐなれるよ、がんばろ」

夏休みは遊びを返上した。

オープンスクールという高校見学を幾度か受けた。

「黒錠くんは何処受けるの？」

「ん、浮島からは出たくないから一応柊高校？の予定」

偏差値32、私の現在偏差値は28なので少しどころか全然足らなかった。

「・・・私も受けない」

「え？」

「その高校！」

勉強会での宣言は私へのある種の枷となった。

私は必死に勉強した。

黒鉈くんも同様に勉強した。

互いの順位は登っていき、冬休み直前のテストではついに私は20位になった。

「すごいね、坂崎さん」

「あ、あのさ黒鉈くん」

「？」

私は大胆なお願いをした。

「紗葵って呼んで欲しいんだ」

黒鉈くんは目をぱちくりさせ

「い、いいよ。紗葵、でいいの？なんか照れくさいな。俺も悠一でいいけど」

黒鉈は鈍かった。

「あ、うん。悠一？」

「そそ」

学校が主催する模試で柊高校への確率はC判定だった。

少し足りないのだ。

悠一はA判定で、余裕のようだった。

過ぎ去りし1年、15歳の私は受験を迎えることになった。

志望校はやはり柊高校。

「受かるといいなあ」

「悠一は受かるよ」

「紗葵も大丈夫だろ？」

受験当日、受験会場で私は黒錠くんに言った。

「もし、受かったらなんだけど」

「うん」

「付き合ってください」

渾身の力を込めた。

私の手はブルブルと震えていた。

「っ……な……」

悠一は激しく動揺している。

「……お願い」

「……絶対受かれ」

「……え？」

悠一は顔を朱に染め

「絶対受かろう」

試験用紙を裏返した。

（あれ……わかる！？）

私は驚いた。

私は悠一と付き合えることが出来る切符を入手した。

「悠一！受かった！受かったよ！」

「じゃあ俺の彼女決定だな」

すごく嬉しかった。

この幸せが、長く続いて欲しいと思った。

あの日を境に崩れ去るとも知らずに。

狂気

- 2030年4月2日 GPS故障位置不明、時刻不明 -

ひとりの女が、廃墟に居る。

辺り一帯は幾度と無く爆撃に晒され廃墟と化し、かつての栄華はない。

女は武器を持っていた。

アメリカ合衆国製、REMINGTON M870マリヌマグナム

クロームメッキ仕様のM870であり、錆ないのが売りだ。

女はM870を片手で横にして下部の装填口に12ゲージショットシェルをカチャンカチャンと入れた。

「こちらウルフ1、制圧しました」

『こちら本隊、了解。帰ってこい』

女は一息つき、自分が始末した兵士を見た。

かわいそうな人、日本を攻めなければこんな目には合わなかっただろうに。

兵士は散弾を胸に受けて絶命していた。

防弾パネルに加わった衝撃で胸が潰れたのだ。

女は兵士の頭に取り付けられたHUDを取り外し、肩の小型CCDカメラの接続ケーブルを抜いた。

次に中華人民共和国連邦軍制式採用21式自動歩槍を手から剥ぎとって弾倉を抜き、薬室からも1発抜いた。最後にセイフティをかけて置く。

兵士のうつろな目はだんだんと白く濁っていく。

ポケットを探ると身分証明の「中華人民共和国連邦陸軍第23特殊機甲団」の手帳が出てきた。

パラッ、と写真が落ちる。

女はソレを見ないで手帳を兵士の手に握らせた。

最後にその手を胸の上で組ませ、ちょうど棺に入るようなスタイルにして部屋を後にした。

「・・・時計が壊れた」

女は以前、親しい人からもらった衛星電波腕時計を見た。

針は先ほどから動かない。

デザインは彼女の身につける市街地野戦服には似合わない可愛らしいモデルだった。

「・・・はあ。これで・・・彼の思い出は心だけにしか無いよ」

女はトボトボとその崩れかかった建物を出ていった。

- 2028年8月15日 日本 -

「ここに、自衛隊の解体とPRCSへの所属を宣言します！」

時の総理、吉行康二はとんでもない発言をした。

彼はPRCSへの所属を宣言したのだ。

PRCSは即座に吉行本人にコンタクトを取り、彼にPRCSが動けることの出来る西日本へ移ることを命じた。

自衛隊解体に、陸自を始めとした各部隊が反乱を起こし、内閣の意に従わないという宣言をした。

- 2028年8月20日 アメリカ合衆国経済破綻 -

大国の経済破綻は大きな波乱を起こす。

経済の乱れ、政治の乱れ。

吉行はこれを予測してのPRCS加盟だった。

PRCSに入れば国が救われると思ったのだ。

当時の官僚もまた同様であった。

沖縄の海兵隊、横須賀のアメリカ海軍など、在日米軍は本国からの帰隊命令で基地を開けることになった。

PRCSは狙っていたのだ。

中華人民解放軍の空挺作戦部隊は海兵隊撤収前夜に強襲作戦を起した。

後に言うPRCS海兵隊襲撃事件。

海兵隊は為す術がなかった。

本国からはメンテナンス機材が輸送されず、暫くの間無稼動状態だったのだ。

一部部隊を除く全滅。それが海兵隊の残した最後だった。

沖縄は占領された。

すぐさま自衛隊は本州上陸を狙う中国軍との交戦に入った。

しかし吉行による自衛隊廃絶論によって左翼化した一部士官が戦闘を放棄、PRCS軍に帰属した。

離反者達は次々に増えたが、日本を防衛するという念を抱いた自衛官達は西日本を離脱した。

吉行も東日本を離脱し、西日本の博多に政権を構えた。

PRCSは世界中へ軍事作戦を展開した。

2027年に発生したエジプト大地震に派遣された人民解放軍はエジプトを拠点に2029年からアフリカを攻撃。

本国中国ではモンゴル軍を率いてロシア連邦へ攻撃を開始。

並んでEU圏内への攻撃を開始。

さらに油田確保を狙って中東はパキスタンのPRCS海軍港から機動性の高い潜水艦を保持した部隊がオマーン湾を越えてオマーンへ侵略を開始した。

日本は西日本と東日本に別れ、愛知、岐阜、福井をまたいで国境が制定された。

中間となった位置にはあの浮島も含まれていた。

この県達は戦争で廃墟となり、非武装地帯に指定された。

だが、レジスタンス達は非武装地帯にいたのだ。

そして西日本自衛隊（WJSDF）とPRCSはこれらを非武装地

帯を越えて制圧していた。

東日本自衛隊（EJSDF）はこれを見過ごすほかなかった。

女は崩れかかった建物を出ると走って別の建物に隠れた。

「ナイス、紗葵」

坂崎紗葵、女はその名前を持っていた。

「はい、これ食料。子供たちに」

ウェストポーチから出したのは先ほど倒した兵士が持っていた西日本製の栄養補助食品だった。

「ありがと。怪我不い？」

女性は坂崎の体を見回す。

「いや・・・でも時計が壊れた」

「それ彼氏さんの思い出なんだよね・・・」

「・・・っん」

- 2028年9月4日 名古屋急襲事案 -

あの日、私は疎開をしていた。

私たちの住む浮島は軍事的拠点として有名すぎたために疎開をさせられたのだ。

実際疎開して二日後に中国海軍潜水艦により浮島の脚部が破壊され、さらに陸橋が切断された。

私と母、そして悠一一家は父の実家がある名古屋市郊外の一宮市に身を寄せていた。

食料は各市町村での配給制となり、コンビニやスーパーは暴徒によって襲撃されてしまった。

父、坂崎修一は8月21日に沖縄本島防衛に従事し、行方不明になった。実質上の「MIA」（ミッシングインアクション）である。

通りには陸上自衛隊員が等間隔で並び、自走式対空砲や対地ミサイル発射機が空き地に設置された。

爆音を響かせて戦闘機が制空を確保する。

9月4日、私はその時悠一と話していたのだ。

「・・・誕生日プレゼント遅れてごめん」

「ううん、いいの。こんな時だし・・・」

「ちゃんと用意したからさ。今渡すよ」

「え？」

彼はにっこり笑い

「実はさっき取ってきたんだ」

まさか、浮島まで行っていたの？

「そう、と言いたいんだけど違う。実は疎開の時に鞆を駅においてきちゃってさ。駅員室にあったんだよ、おとしもので」

「なるほど・・・」

「だから・・・」

ドオオオオオオん！と大きな爆発音が轟いた。

悠一は家のベランダへ駆け上がる。

そこには理奈おばさんとおばあちゃん、お母さんと悠一のお母さん、そして悠一がいた。

「一体何があつたの!？」

「・・・空中戦」

お母さんが空を指さした。

数十機の戦闘機が互いに雲を引きながらくるくる回っている。

「ミサイル攻撃可能距離より狭いわ。機銃による格闘戦」

と、悠一のお母さん。

「あっ・・・！」

おばあちゃんの声は確かに聞こえた。

1機の戦闘機が黒い煙を吐きながら錐揉み飛行で地面に墜落した。

ズドオオオン！！！！と大爆発を起こす。

「居住区に墜落・・・」

お母さんはそう口に出した。

「不味い、凜不味い。空挺部隊の輸送機よ、あれ！」

1機のズングリした飛行機が空中に現れた。

そこから白いものをポンポンと投下していく。

「空挺部隊が命じられるのは市町村機関の襲撃。ここから市役所は！？」

「遠いわ」

悠一のお母さんに渡しのお母さんがさつと返す。

しかし、事態は緊迫していた。

『こちらは陸上自衛隊です！住民の皆さんは外へ出ないでください！戦闘機が落下してくる可能性があります！』

道の前を装甲車が唸りを上げて空挺部隊が降りた方へ向かう。

それから戦闘音になるまで長くはかからなかった。

砲声はミサイルの音とも墜落の音とも違った。

住人たちは我先に道を逃げた。行く宛もなく、タダ戦闘から。

「龍神1は右翼へ展開せよ！」

ついに聞き覚えのない言語が街を埋め尽くし始める。

「凜ッ、こっち！自衛隊から離れないと！」

みんなは逃げた。

だが、人ごみで私と悠一だけはぐれてしまったのだ。

「ニホンノミナサン、ワレワレハテキデハアリマセン！ドウシデス！スミヤカニスガタヲアラワシテクダサイ！アタカイシヨクジモアリマス！」

ザッ、ザッ、ザッと編み上げ靴の音が響く。

「・・・っ」

私と悠一の隠れる家の外壁のそばで兵士が立ち止まった音がした。

「ヤン、こっちに誰か居るぞ」

私達には理解出来ない言語だ。

「・・・紗葵、お前だけ逃げろ」

「・・・！？」

「逃げろ」

悠一は真剣な顔だった。

「なんで・・・？」

「・・・お前は生きていて欲しい。ソレに生きていればまた会える、
だろ？」

「・・・ダメッ」

悠一は困った顔をして

「ああ、そういえば」

と、ポケットから包を出した。

「似あうといいけど」

包を開けると中にはピンクのカジュアル腕時計がはいていた。

「じゃあ、また」

そう言い残し、彼は家を飛び出していった。

私は忘れない。

彼が、二人の兵士に引きずられていった姿を。

- 2030年4月2日午後4時20分 GPS復旧。位置、愛知県
一宮市 -

「偉大なるPRCS軍は本日、ロシア連邦内陸部に到達致しました。
これは同胞モンゴル陸軍バイク中隊による活躍で -」

テレビがぶつんと切れる。

「みんな聞いてくれ、ブリーフィングだ」

レジスタンスリーダー、堀尾望42歳。元警察官。

「先ほど坂崎くんの斥候と情報収集でわかったことがある」

紗葵は堂々と座り、コクンとうなづく。

紗葵は喋り始めた。

「PRCSは我々の仕掛けた対戦車地雷原に引っかかりました。現在爆発物処理班が対応しています。その部隊はしばらく足止めです。それと大型のホームセンターに敵が居るようです」

地図を広げ、トントんとホームセンターを叩く。

「スーパーと一体化しています。ここは屋上もあってヘリが駐機できるので敵はここをいずれ本部にするでしょうが現在は資材集積所です」

堀尾は

「ここを午後１０時に襲撃し、資材を奪う。可能なら車両も」

- 午後１０時１０分 ホームセンター敷地外 -

『こちら観測班。資材集積場には警備兵が数名。しかし、ヘリコプターがサーチライトで警戒飛行中。機種、Z-11偵察機』

「こちら本部、分かったありがとう。車両は？」

『自動車が普通に止まっていますが、ホームセンター側の天井のある外部スペースに２台ほど軍用バギーが止まっています。武装は・
・銃座に重機関銃、助手席に軽機関銃』

堀尾は頭の中でP R C S制式採用の野戦偵察車「LYT-2021」と判断する。

「わかったありがとう」

堀尾は無線の周波数を変えて呼びかけた。

「攻撃チーム、応答を」

「こちら坂崎。ゲートを守る警備兵が二人。両方共、装備はW J G

SDF（西日本陸上自衛隊）」

WJGSDFとPRCS陸軍の見分け方は簡単だ。

PRCSは軍服の左胸に「PRCS」と彫り込まれているが、WJGSDFは「JAPAN」と記されている。

更に武装もPRCSとは違い、21式自動歩槍を用いず陸上自衛隊制式採用の17式5.56?自動小銃改を使う。

東西陸上自衛隊は17式5.56?自動小銃を使うが、東日本陸上自衛隊は西日本のあらゆる駐屯地から兵器や弾薬を輸送したため西日本陸上自衛隊は5.56?NATO弾を持っていない。

そのため彼らは機構部に21式自動歩槍の使う5.8?弾を使用できるように改良したものを使っている。（以降17式5.8?小銃）

しかし他の兵装はすべて同じのため、遠距離からでは識別できない。

『わかった。彼らを、始末してセンターへ侵入せよ』

坂崎紗葵と、もう一人は中学から同級生だった新垣魅来。

「魅来、ふたりとも倒す。右側よろしく」

「わかったわ」

ふたりとも腿に着けたホルスターから日本警察が一部採用していたベレッタM92FSVertecを取り出した。

何処から手に入れたのか、ご丁寧にサプレッサーまで付いている。

「3・・・2・・・1」

パスッ、パスッ

二人の兵士は首筋に赤い花を咲かせ、倒れた。

坂崎と新垣は慣れた手つきでHUDをネットワークシステムから切断し、肩のCCDカメラも解除する。

そして遺体を引きずって草地に隠す。この間10秒。

坂崎は右手で手招きをした。

男5人ほどが、全員17式5・8？小銃を手にとってくる。

坂崎が顎で兵士の遺体を指すと、男たちは手早く装備品を外して持ち去った。

「こちら坂崎。番兵無力化。狙撃班に支援を求む」

『堀尾、了解』

堀尾はまたチャンネルを切り替え

「観測班、狙撃用意」

『了解』

狙撃手は元自衛隊員の老齡兵士の板津、そして観測手の荏沢。

「・・・南無阿弥陀仏」

板津はP R C S製の85式狙撃歩槍を手にとっていた。

P R C Sは狙撃銃開発には興味を示さなかったため、85式がP R C Sでは最もポピュラーな狙撃銃である。

一部精銳部隊や後方部隊には88式狙撃歩槍が導入されているが、今だ全部隊に行き渡っていない。

85式狙撃歩槍は旧ソ連のS V D狙撃銃を中国北方工業公司、いわゆるノリニコ（ノーリニコ）がライセンス生産したものにつけられる名前である。

85式は経年で幾つか改良点が加えられ、S V Dの象徴的であった木製のハンドガードや肉抜きされたストックをすべて近代化に合わせてプラスチック化した。

弾丸も5・8?弾を使用する。

板津は85式のピストルグリップを握り直し、トリガーに指をかける。

「こちら板津、下の連中に準備させる」

『了解』

「・・・定時連絡。駐車場東、異常なし」

『了解』

一人の兵士が首筋の無線機のスイッチを人差指と中指できつた。

ズダンッ

5・8?の弾丸はその人差指と中指を切断して首を貫通した。

「・・・あが・・・」

兵士は命の抜けた、抜け殻となった。

脳は体へ送る信号を止め、体は糸が切れた操り人形のように。

「銃声!？」

ホームセンター内の一角にある本部に居た兵隊は一気に外へ走りだした。

「撃て！」

坂崎の合図で全員が撃ち始める。

全ては待ち伏せ。

飛び出した兵士たちは自ら蜂の巣になった。

「撃ち方止め、撃ち方止め」

硝煙が立ち込める。

「・・・クリアリングを」

男たちはそれぞれ普通の服を着ていて、手にはアサルトライフルを持っている。

男たちは殺した兵士の首実検をして装備品を奪い取った。

「・・・ホームセンタークリア」

一人の男がボソリ。

坂崎紗葵はその声を無線で聞いて別の区画を調べた。

「・・・あつた」

大量の軍用糧食。

P R C Sは軍事糧食の技術が乏しく、味も悪い。

だが、栄養価は高い。

その在庫ストックが大量に倉庫に積み上げられていた。

「こちら坂崎、食料を確保。M R Eです」

『こちらホール班、了解。トラックを持っていく』

- 2 時間後 -

「こちらトリアージ1、本部応答せよ」

『こちら本部』

「連絡の絶えていたホームセンターエリアを調査したところ全員が死亡していた。加えてLYT2021と食料、武器弾薬全てが強奪されている」

『了解、敵兵を搜索しこれを撃退せよ』

一人の若い兵士が、殺された戦友を見た。

その兵士は手が組まれ、まるで安らかに眠っているかのように置かれていた。

「 またか」

「軍曹」

兵士の後ろからまたかとおづやいたのは、若い兵士の上官である軍曹だ。

軍曹は部下の若い兵士に喋った。

「この手の死体が最近増えている。いや、戦争開始直後からあった。奴は近くにいます」

「・・・眠りし兵士？（Sleeping Soldier）」

若い兵士の返答に軍曹は

「そう、奴はそう呼ばれている。我々からすれば不気味なやつだ。死者を吊う。しかし、それは自分で殺した相手なのだ」

軍曹は踵を返して

「上等兵、トラックに乗れ。基地に帰投する」

「は」

若い兵士は仲間の遺体を死体袋に入れてトラックに積み、兵員輸送トラックに乗り込んだ。

「陸軍はなんと？」

「ああ、装備増強のめどが立ったからあのレジスタンスの街を攻撃するらしい」

「しかし・・・あれは、あれは民間人居住区ですよ？」

「我々空軍には関係のないことだ」

「はあ」

「そういえば、あの地域の外にある商業地域はどうなっている」

「ああ、地元民からは中国に身売りした人たちが営む店が多いとして失われた国籍区域とかと呼ばれています」

「ふん、PRCSを愚弄するのか」

「現在、陸空軍の兵士たちの娯楽スポットとなっています」

「わかった」

「しかしジユウ中佐」

「？」

「我々空軍も、レジスタンス掃討作戦に駆り出されるのでは？」

「その時は爆撃機でも出してやればいい」

Drag Race

「最近、居住区を中心に麻薬が出回っている」

堀尾は机に白い粉の袋を出した。

「通称Flying Sky、極めて強烈な覚醒作用と依存性がある。成分は不明だが少年たちの間で出まわり、すでに死者も出ている」

堀尾は地図の居住区を叩き

「このエリアでバイヤーは目撃されている。堂々と売買していることからおそらくは、PRCSの手のものだろう。すみやかに調査し元凶を断て」

- 4月20日：午後8時20分：居住区商業エリア、通称「失われ
た国籍地域」：天候・雨：作戦担当・坂崎紗葵 -

「コイツを持っていけ」

「護身用ですか？」

「そうだ。この地域は治安警備隊の巢窟だからな。リカバリーポイントはここだ。時刻は10時から10時5分の間。ソレまでに戻れないなら連絡を。連絡がない場合、我々は君が捕まったと見て脱出せねばならん」

「・・・了解」

坂崎紗葵は担当の男から治安警備隊も使用するシグザウエルMOS
QUITOを受け取った。

「その銃は・22LR弾だ。君がいつも使うベレッタとちがって殺
傷能力は極めて低い。しかもこれに使われる・22LRの弾種は殺
傷用ではなく電気ショックを与える電撃弾だ。体に当てた程度では
気絶しかないし、殺すのは控える」

「了解」

坂崎は新垣魅来と男性の仲間、所沢吉二を連れて街へ出た。

一見、女二人を侍らせる中年男性だ。

所沢は30歳にして白髪でシワが刻まれた顔をしていたのでこの任
務に抜擢された。

このエリアはカジノ、売春宿が集合した娯楽地域になっていて、P
RCSや西日本陸上自衛隊の休暇を過ごす場所となっている。

周りは酔った兵士たちが闊歩し、売春婦を抱いている兵士も目立つ。

一部には戦後復興バブルで金を儲けた日本人も歩いている。

ここを歩く日本人は3割がPRCSに身を売った売国奴と呼ばれる
人間、6割が生きたために体を売る日本人の女、そして残りの一割
は誘拐され体売られる青少年。

ここの街を警備する治安警備隊は西日本陸上自衛隊傘下の組織で武装はノリンコ製09-1式散弾銃（ゴム弾）、そしてシグザウエル MOSQUITO。

音響手榴弾を装備した暴徒鎮圧装備をしている。

彼らは元日本国警察官で構成され、旧陸上自衛隊で使用していた高機動車を使う。

「麻薬はこの近くの元電器店のカジノ付きバーから出回っている。子を殺された親たちが必死に調べた結果だ」

所沢は戦争で家族を失っていた。

それ故か、憎しみのこもった声でしゃべっていた。

「突入装備ではないですよ？所沢さん」

坂崎は正論を言ったのだが

「もちろん。奴が何処へ行くか見張り、人通りの少ない道で情報を聞き出す」

店は盛況していた。

このエリアはPRCSなどの軍人たちが立ち寄るエリアからは離れている。

どちらかと言えば居住区の日本人がよるような店だ。

西日本政府はこのエリアを「危険域」として復興政策をしていない。

職にあぶれた日本人は日雇いの仕事だけで、酒に溺れる。

「半か丁か!？」

「半!」

「半!」

「丁!」

「半!」

賭博、賭けられているのはPRCSの流通通貨である「連邦元」。

日本円は東日本でしか流通していない。

旧日本円は西日本では紙くずとなった。

男たちはそれを賭け合う。

ほとんどが汚い身なりをしている。

一人だけ、羽振りのよさそうな男がいた。

80年代からきたようなラッパのような格好で、サングラスにニット帽をかぶった。

坂崎達3人は空いている席を確保し、所沢がウイスキーを頼んだ。

「私は飲めませんよ?」

「私も」

という坂崎と新垣に

「君たちは飲まなくていい。俺も飲まん。おいておくだけだ。何も注文しなけりゃ怪しまれる」

ラッパ男は机に白い帯付きの連邦元の札束を乱雑に置き、娼婦達に酒を飲ませていた。

「金はいくらでもあるんだ、飲め飲め」

そこへ学生と思しき少年集団が入ってきた。

本来なら、高校生活をおくれたであろう年齢の。

坂崎もまた、そうであったように。

新垣もまた、そうであったように。

「FSちようだいよ、長瀬さん」

少年集団の先頭がラッパー男に向かって話しかけた。

「いいけどさ、金。金は？円なんて出したら頭ふつ飛ばすぞウ？」

ラッパー男は服のポケットから馬鹿みたいに派手な44口径リボルバーをガンマンのように回しながら出した。

スタームルガーブラックホークと呼ばれるこのシングルアクションリボルバーはSAAをモデルに再設計された回転式拳銃で

弾丸は幅広く使えるよう設計されている。

ラッパー男はこれに9？パラベラム弾を入れているようだ。

「あるよ、ホラ！」

ドサツ、と10束ほどの連邦元が出された。

「ひいふう・・・フム、いいだろう、ちよつとまで」

男は乱雑にその札束をボストンバックに入れて、別のボストンバックを探り始めた。

「1?の末端価格は100FY（連邦元）ってトコだ。こんだけならまあ、2?ってトコか。ホラよ」

ドサツと梱包された袋が少年に手渡された。

「またのご利用を」

ラッパ―男はそう言いながらも手では向こうに行けと言わんばかりに手を向こうへ振っている。

少年たちは腰から銃をちらつかせながら帰っていった。

「間違いない。奴が一人になる時を狙おう」

所沢は時計を見た。

「8時45分、まだ大丈夫だ」

雨音は激しくなる。

ザアア、という雨音はなにか全てを飲み込もうとしているようだった。

外に車が一台止まった。

店のドアを乱暴に開けて入ってきたのは治安警備隊。

「マズッ・・・!？」

「動くな、坂崎、新垣。俺達じゃない」

坂崎が立ち上がろうとすると所沢がソレを制止した。

治安警備隊は4人。

手には警棒。腰に拳銃を入れたホルスター。

警備隊達はラッパー男にあゆみよった。

「長瀬さん、アンタに会いたいつて人が・・・に来てる。せめて携帯電話ぐらい電源を入れたらどうだ」

場所が聞こえなかった。

「ああ、すまねえなあ！中国製はどうも慣れなくて」

PRCSは携帯電話網を停止するため、戦争初期に電波塔という電波塔を攻撃した。

ソレには飽きたらず携帯電話会社のサーバーまでも。

日本製の携帯電話は西日本では全てゴミになった。

停戦後、PRCSは自国製の携帯電話を搬入し、法外な値段で売り

つけた。

「俺たちやガキの使いじゃないんだぜ？」

ラッパ―男はため息を付き

「ホラ、悪徳警官さんよ」

と、ひとつかみの札束を隊長と思しき隊員に渡した。

「そんじゃ、きいつけてな。最近アンタを消そうってユーレジスタンス野郎が増えてる」

「マルキシストにはまけねえよ」

警備隊は客に絡みながら、時折殴りながら店を出ていった。

「ハア・・・ワリイが姉ちゃんたち。オラア帰るわ。そのの札束全部やつから、全部忘れろよ？」

娼婦たちはハア―イといって札束の分配で揉め始めた。

「くわばらくわばら・・・」

ラッパ―はボストンバック2つを手に下げて店を出た。

「追跡開始する」

所沢と坂崎と新垣も店を出た。

男は人ごみをかき分け、時々銃を振り回しながら道を進んでいった。

「時刻、9時10分です所沢さん」

と、新垣が耳打ちすると

「分かった。坂崎、堀尾に尾行開始、リカバリータイムを遅らせろと伝える」

「了解」

坂崎は首筋に手を当て、無線のスイッチを入れた。

「こちら坂崎。現在追跡中。リカバリータイムを遅延せよ」

『了解』

男は20分ほど歩くと人気のない路地に入った。

「此处から先は売春婦街だ。滅多に民間人は入らん。今だ」

3人は徐々に距離を詰め、ラッパ―男を脇道へ引きずり込んだ。

「うわっ！？エッ！？」

「動くなバイヤー、てめえの薬の出所は何処だ？あ？」

所沢は男の肩に手をかけ、背後から背中に拳銃を押し付ける。

「坂崎、ルガー回収しろ」

坂崎は言われたとおりに男のポケットからブラックホークを取り上げた。

「クソ、てめえらよ、この鞆の金全部やつから見逃してくんねえ？」

ラッパー男はジタバタしながら答えた。

「てめえの金玉が吹っ飛ぶぞ、この位置なら」

と、所沢が背中越しに答えた。

「ああ、くそ・・・」

その時、大勢が走ってくる音が聞こえた。

「動くな、治安警備隊だ！拳銃不法所持及び恐喝で拘束する！抵抗するな！」

先ほどバーに居た4人だった。

違うのは手に09-1式散弾銃を持っていることだ。

気を取られた隙にラッパー男が逃げ出した。

坂崎はハッとしてあることに気がつく。

チャンスは一度、そう思って。

坂崎は素早く先ほどのブラックホークを構えて4人の敵の内、隊長の胸に付けられた音響手榴弾に銃を撃った。

弾丸は手榴弾に命中し、爆発した。

音響もフラッシュもなく、ただ炸薬が爆発した。

隊長は爆発で腕がもげた。

音響といえど爆発すれば殺傷能力はある。

横に並んだ隊員たちも爆風で吹っ飛んだ。

「ナイス、紗葵ッ！」

「追うぞ！」

坂崎達はラッパー男を追いかけた。

男は路地を左右に入り、必死にまこうとしている。

坂崎達はラッパー男に見えない位置から追跡したため、男はまいたと勘違いした。

男は普通に歩き、雑居ビルに入っていった。

「モーターだな」

売春婦たちと情事を営む艶めかしい声が漂うビル。

「突入を？」

「いや、待て。みろ」

所沢は窓を指さした。

中にはPRCSの軍服をきた兵士たちが大量に居た。

「この状況じゃ無理だ。何か策を」

「上等兵、彼を5階までお送りしろ」

軍曹は一段と嫌そうな顔をしていた。

「ハッ」

ホテルは苦手だ。

このなまめかしい声は俺の思考を阻害する。

「なあ、上等兵さんよ」

護衛対象の男が話しかけてきた。風変わりな風体をした男だ。

「SFいらねえ？」

「SF？」

「ああ、知んねえの？ならいーや」

何なんだ、コイツは。

俺は今日、このビルの警備を任されていた。

利用客の8割はPRCSの非番兵だ。

残りの2割もPRCSに関わりを持つ。

俺は男を5階まで連れていき、別れた。

裏口にでも行つて頭を冷やそう。

どうにも股間が疼く、ここは。

「おい、坂崎。大丈夫か？」

「任せてください。やります」

坂崎は裏口からの侵入を試した。

服装はいかにも、という感じだが・・・まあ、いざとなればそういう趣味の客を相手するといえはいい。

裏口は警備員が居ない。

ドアを開けるとそこには兵士がいた。

裏口でレーションに入っているチョコをかじろうとしてフェイスマスク（バラクラバ）を外そうとした時、裏口から誰かが入ってきた。

「ん・・・」

「あ・・・」

兵士はまず動いた。

「う、動くな!？」

兵士は人物の体格がやけに小柄なのに気づいた。

人物は顔をマスクで隠し、まぶかく帽子をかぶっているし性別もわからない。

とにかく兵士は銃を構えた。

人物はチツ、と舌打ちして

「そこをどいて、上等兵」

坂崎はまずったと思った。

そこにはフェイスマスクをしたPRCS兵がいたのだ。

チツ、と舌打ちして階級章を見た。

「そこをどいて、上等兵」

「お、女・・・？」

上等兵は銃を下ろした。

？、と坂崎は怪訝に思った。

なぜ、銃を下げるのか

「なぜ、銃を下げるの？」

兵士は答えた。

「女に銃を向けるのは趣味じゃない。何しにきた？」

「・・・ラッパ男を探しに」

ああ、と思った。

さつき護衛しやつだ、と。

「奴は何者だ？」

「麻薬売人よ」

犯罪者？ P R C Sは犯罪者さえ囲うのか？

上等兵は P R C Sに疑念を抱き始めていた。

「とにかく、済まないが通してやることはできないんだ。君も俺を撃つ気はない、だろ？ 腰の拳銃に手を伸ばさない当たりから」

「・・・」

坂崎は何故かこの兵士を撃てなかった。

撃てば敵にバレるというのもあったが。

「すまないが・・・帰ってもらえると嬉しい。ここにはPRCSが
ゴロゴロ居る」

「長瀬、今日の上納金は」

「へいへい、チャンさん。これだけ、これだけだ」

ラッパー男はドサリ、と50束ほどの札束を出した。

「軍用麻薬の効果は」

「依存者は殆ど凶暴になってる。買つのに支払う金は大体血に汚れてるのが物語ってる」

「フン、日本人は馬鹿だ」

チャンは金を数え終わると突然

「お前の利用価値は無くなった」

ズドン、と銃声がした。

「・・・あ？」

長瀬は撃たれた勢いで窓を突き破った。

「クズが、金を使い込むなといったのに。所詮、日本人か」

チャンは腹心の兵士を携えてビルを下りてP R C Sの公用車に乗って場を後にした。

銃声は二人を驚かせた。

『銃声は気にするな。繰り返す。気にするな』

無線はそう伝えた。

「どういつことだ・・・あ」

上等兵が目を離れた隙に女はいなくなっていた。

無論、出口から出ていった。

「・・・まあ、いいか」

新垣と所沢の目の前にラッパ―男が落ちてきた。

「!?!?おいつ、どうした」

所沢は男の脈を調べた。

微弱だがある。

「おい、お前は何処から麻薬を手に入れた!?!」

ラッパ―男はか細い声で

「・・・チャン・・・ソルドク・・・陸軍医官」

男は生き絶えた。

「チャン・ソルドク?」

「ええ、バイヤーは最後にそうと」

リカバリーポイントから本部に帰還した坂崎達はデブリーフィングを行った。

「陸軍の医官だそうです」

「フム・・・やはりPRCSが絡んでいるのか、この一件」

堀尾は煙草を吸って

「分かった。チャンについてはこちらで調べておく。ご苦労だった。ゆっくり休んでくれ」

本部は図書館に置かれている。

周りは爆撃を受け、倒壊する建物ばかり。

ここも半壊している。

坂崎はコンクリの上にしかれたマットレスに倒れこむ。

「ハア・・・」

あの兵士はなぜ私を、撃たなかったのだろうか。

何故だろう。

しかも私も撃ってはいけなと感じた。

誰なんだろうか

「陸軍は母国から新たに20式戦車を空輸するそうです」

「フン、我らの輸送機を使つてか」

「ええ、まあ」

ジユウ中佐は椅子に座つて葉巻を吹かす。

「やるか？ キューバ産だ」

「い、いえ自分は」

「ふん、医者らしいな」

医者と呼ばれた部下はバツの悪そうな顔をして

「禁煙していますので」と。

ジユウ中佐はゴリゴリ、と葉巻の火を灰皿でもみ消し

「そついえばお前が飼っていた日本人、どうした」

「は、今日始末しました」

「薬の効果は？アレを空軍機に搭載する予定もある」

「即効性の強い致死薬への改良が可能です。空軍機への搭載も可能です。粒子が重いので巻散りません」

ジユウ中佐はニヤリと笑って

「よくやった、チャン大尉。陸軍の私のスパイとしてよく働いてくれている」

「いえ」

ジユウ中佐ははっと思い出したように

「そういえば、ヤツの女はどうしている」

「ヤツ・・・、ああ黒い紳士と恐れられたかの男の妻？」

「ああ」

「あの女なら陸軍の本部地下の収容所に」

「あの男は沖縄で行方不明になったただけだ。部下は西日本陸上自衛隊に居るらしい」

チャン大尉は渋い顔をして

「まさか、生きていると？」

「あの男とは幾重も戦ったこそ、言える事実だ。奴には娘がいたが、

その所在はまだ特定できないのか？」

「戦中の混乱で住所を紛失し、詳細な位置情報もつかめていません。我が方の兵士に殺されたか、街の何処かに住んでいるのか、それとも東へ渡ったか」

「・・・見つけることがあれば捕らえる。いい餌になる」

- 東日本 特別首都東京 -

「近々、PRCSの陸上戦闘兵器が名古屋に輸送されることがわかりました」

「・・・うん」

「真賀山陸将？」

「ああ、すまない」

「どうかされたのですか？」

白髪の老人は椅子に座りながら

「いや 何。昔のことを思い返していたんだ。沖縄に派遣してしまったことを思い返して」

「ああ、坂崎3等陸佐のことですか？」

「うむ・・・アイツは娘もこさえて・・・悪いことをしたと」

老人はこめかみを人差し指でさすって

「で、P R C Sが何をした？」

部下は書類に目を向けて

「20式戦車です。P R C S鳴り物入りの」

「ああ、120？滑腔砲を積んだ従来の戦車のコピーか」

「ええ、平たく言えば」

老人は笑い

「奴らさては停戦ラインを超える気だな」

「・・・は？」

「ロシア連邦での勝利はかなり確実になってきているのが事実だ。
モンゴル陸軍のコンバク・ハン中将の指揮するバイク騎兵部隊は強い」

部下は頷いて

「では、国境軍に通達を？」

「ああ、近々戦闘になるだろう。その用意をさせろ」

時代は再び戦争へと傾きつつあった。

マルキシストジェノサイド（前書き）

皆様Xmasはいかがお過ごしでしたでしょうか。

さて、もう年末です！

マルキシストジェノサイド

坂崎紗葵、所沢、別部隊からきた武藤敬司の3人はPRCSのパトリール部隊が通る道にピアノ線を使ったブービートラップをしかけていた。

「・・・よし」

坂崎は崩れかけた通路に仕掛け、立ち上がる。

「ッ・・・来たぞ。用意」

3人は頷き合って散った。

「天龍分隊、ポイントアルファ・ノヴェンバーを通過。今のところ異常は無し」

『了解』

5人ほどの分隊が各々違う方向を警戒しながらその崩れかった通路に入ってきた。

先頭のポイントマンの兵士がゆっくりとピアノ線を足に引っ掛けた。

「トラッ」

ズドン

大爆発。

「撃て」

所沢の合図で坂崎と武藤が撃ち始めた。

21式自動歩槍が軽快に銃声を立てる。

「・・・クリア」

坂崎は死体の一つを手を組ませる。

「・・・！」

人の気配を感じ、振り向くとまだ息のある兵士がいた。

坂崎はホルスターからM9を取り出して頭に撃ち込んだ。

その様子は肩のCCDカメラに収められた。

「眠れる兵士の正体は女？」

軍曹が無線を受け取って言った。

現在我々、WJGSDFはある任務を帯びていた。

それを遂行するため、軍用トラックに乗っている。

「分かった・・・そこなら近い」

3人は基地へ向かう道を歩いていた。

「・・・戦争はどこまでも、か」

所沢のつばやきに全員が黙った。

坂崎は修理した時計を見て

彼に、会いたい。

そう思うだけだった。

「・・・視認した」

「同じく。撃ちますか？」

「・・・撃て」

上等兵は08式80?ロケットランチャーを構えた。

高所の位置になる。

発射スイッチを押すとロケット弾がカウンターマスを後ろへ飛ばして発射された。

「!？」

坂崎が気づいた頃にはすでに遅かった。

弾頭は頭上の建物に当たり、崩落した。

「・・・死亡確認！」

「・・・こつちもだ！」

WJGSDFの隊員たちは男二人の死体を確認した。

「よーし。お前らは本部襲撃を手伝ってこい。上等兵！」

軍曹の叫び声に若い上等兵が走ってきた。

「はっ！」

「お前はここを警備しろ。何かあれば無線で連絡するんだ」

「了解しました」

「ん……？」

上等兵は瓦礫の下から手が出ているのに気がついた。

急いで瓦礫をどける。

「……女？」

上等兵は17式5・8？小銃で小突いた。

「生きてるか？」

瓦礫に埋もれていた女は肩まで毛があり、黒のウールを着ていた。

「……民間人？」

もしかしてさっき撃つたときに巻き込まれた？

おいおい、死んでないだろうな

そう思った時だった。

「ん……う……」

女はゆっくりと起き上がろうとしたので

「ま、待て。うごくな」

びくん、と女は体を震わせた。

「俺はWJG SDF、西側の軍隊の兵士だ」

女はゆっくりと振り向いた。

「……紗葵!？」

上等兵は思わず名を口にした。この女を知っていた。

自分が知るかぎりではすごく弱く、すごくおとなしいコだった。

だが、今の彼女は腰にホルスターを下げ、体には弾丸を入れるポーチを巻いている。

「……私の名前を、なんで」

上等兵はフェイスマスクを脱ぎ

「俺だよ、紗葵。黒鈍だ」

坂崎紗葵と黒鈍悠一は、数年ぶりに再開した。

「悠一・・・？」

「そうだ、そうだよ紗葵。いきっていたのか」

坂崎紗葵は目にいっぱい涙をため

「悠一ッ・・・ゆう・・・いちっ！」

黒鈍の胸で泣いた。

2分ほどその状態が続き

「・・・生きてたの？」

「・・・ああ、君と別れた後俺は自衛隊に引き渡された。そこで西

日本陸上自衛隊に入隊したんだ。きっと紗葵はP R C S側に逃げていると思って」

「・・・実は私は」

黒鉦は指で言うのを制止した。

「レジスタンス、だろう？」

坂崎はコクンとうなづいた。

「・・・まさか敵だとは思わなかった。下手すればさっき殺してしまっていた」

黒鉦は目を押さえ

「・・・よかった」

と、言った。

「・・・悪い知らせがある。現在、W J G S D Fは図書館を襲撃している」

「ッ・・・!？」

「・・・長くは持たないだろう。紗葵は・・・紗葵は居住区へ逃げるんだ。早く」

「・・・わかった。悠一、また・・・会えるかな？」

黒蛇は銃を握り直し

「・・・わからない。ただ・・・ただ、そう信じている」

坂崎は必死に図書館に走った。

あそこには、魅来がいる。

「鷗1、制圧した」

『こちら天龍。サーマルゴーグルでは敵を確認できない。殲滅した模様』

「了解。これより撤収する」

坂崎が図書館を古いビルから見渡した時、そこはすでに惨劇の場となっていた。

人々は通りへ集められ、銃殺されていた。

死屍累々、遺骸は100をゆうに超える。

「そんな・・・」

その時、坂崎は肩を叩かれた。

「ッ・・・！」

「待つて紗葵、私」

そこにいたのは坂崎のM870 Marine Magnumを持った新垣魅来だった。

二人は別のレジスタンスの集合場所である市民会館へ移動した。

「状況は最悪だ。本部は陥落、現在他のレジスタンスは居住区で交戦を開始した。非常に、マズい」

堀尾はマイクを掴み

「我々も行こう」

それだけ言った。

レジスタンス達は武器を確認し、市民会館を後にした。

- 東西日本国境付近 -

UH-1YヴェノムやUH-60ブラックホークが多く山中に駐機していた。

周りには大勢の軍服姿の人々が集まっている。

「2等陸佐、戦闘が始まりました」

若い女性士官が上官に報告をする。

「分かった。海自の援護は？」

30代後半の男は女性士官の報告に質問をした。

「現在、イージス艦隊が揚陸艦おおすみと空母あかぎを護衛しつつこちらへ来ています」

女性士官はタブレット端末で確認する。

「よし、作戦を開始する。へりに分乗しろ！」

- 同時刻 愛知県小牧市 -

「・・・敵へり部隊、領空を侵犯！」

「スクランブルだ、殲撃10出撃せよ」

PRCSは戦争中盤に名古屋空港を占拠、空軍基地を置いていた。スクランブル機が発進する。

市内での戦闘は銃撃戦になった。

坂崎、新垣、堀尾はPRCSの司令部がある市民病院を攻撃するため、部隊を率いて脇道に入る。

「現在、他の部隊が司令部を攻撃している。援護をするぞ」

10数名の部隊は歩きで司令部に迫っていた。

いつもは警備が厳戒だが、今日は違った。

坂崎は21式自動歩槍のセーフティを解除し、薬室に弾を送り込む。

「・・・敵だ、撃て！」

ダダダン、ダダダダン！

レジスタンス達は警備兵たちとの戦闘に入る。

「勝てるぞ、撃ち進め！」

堀尾の声にレジスタンス達は声を上げる。

PRCSの警備兵たちを撃ち殺し、ずいずいと進んでいく。

「グラウンドに戦車！」

誰かが叫んだ。

坂崎はその声の方向に視線を傾ける。

かつて高校だった場所のグラウンドに緑の塊が動いていた。

「ッ！隠れる！横薙ぎにされるぞ！」

坂崎の叫び声と同時にグラウンドのフェンスを吹き飛ばしてレジスタンスの居る小道に突っ込んできた。

「逃げー」

緑色の装甲車、97式歩兵戦闘車は主砲100？低圧砲をぶつ放す。

レジスタンス数名が捉えられた。

「ぐああああ！」

「くそ、ロケットランチャー誰か持ってねえのか！？」

坂崎は腰から中国製の手榴弾を出した。最初で最後の1個だ。

「私がやります！」

坂崎は堀尾の制止を振り払って装甲車の後ろに取り付いた。

兵員輸送車であるため、後部のハッチがある。そこをこじ開けた。

中には誰もいない。坂崎はすぐに閉め、ギウルギウルとキャタピラを動かしてレジスタンスをひき殺そうとする装甲車に後ろから飛びつき、車体に登った。

砲塔は絶え間なく動くが、ソレに登って手榴弾のピンを引きぬいた。レバーを持っているため、導火線に火はつかない。

それも外し、戦車長用のハッチをこじ開けた。

戦車兵がちらつと上を見た。

坂崎は構わず、手榴弾を中に落としてハッチの上に座った。

中から叫び声がし、ハッチに強い力が加えられる。

しかし、ハッチは坂崎の重みで開かず、中を吹き飛ばした。

- 御前崎より2000? -

「タイガー小隊、発艦を許可する」

『了解』

F/A-18Jは2019年にアメリカ海軍がF-35Cを納入して退役、モスボールされたF/A-18を借り受けている機体だ。

F/A-18J 3機の編隊はDDA-17あかぎを発艦した。

DDA-17あかぎは2017年に着工し、19年に完成した戦後初の攻撃型空母である。

戦中の空母赤城から名前を配している。

構造技術はフランス製の払い下げ艦シャルルドゴール空母を購入し調査、アメリカ軍より技術提供を受けて開発した。

武装はフランクスCIWSを3基、ESSM短SAM2基、RAM近SAMを2基装備している。

搭載機はF/A-18J、F-35C、F/A-3、E-2、そしてUH-60とAH-1Zを装備できる。

搭載可能機数は75機。

タイガー小隊小隊長、小栗正和1等空佐はシステムチェックを終え、後部座席の田中和将2等空佐に機内無線を送る。

「2佐、HARMの用意を」

「了解、1佐」

先陣を切って飛行をしているE-2警戒機がF/A-18Jに無線

を送った。

『こちらセンチリー、タイガーリーダー応答を』

「こちらタイガーリーダー」

『敵の要撃機インターセプターが上がってきています。機種は殲撃10。数は2機』

「了解」

『PRCSとの戦闘はお久しぶりですか』

「ああ、そうだ。前はアイツらにしてやられた。しかし今度はかりは違う。前は殲撃11、スホーイ27だったからな」

『幸運を』

小栗はHUDを起動して空対空戦闘にはいった。

『仔虎1、応答せよ。仔虎1』

「こちら仔虎1」

『敵侵入機は15機の編隊を組み、このまま行くと愛知県一宮市のPRCS分局を襲撃します。貴官はこれらを迎撃し、叩くことが任

務です』

「わかっている。仔虎1アウト」

パイロットは殲撃10の兵装システムを起動しPL-12空対空ミサイルを選択する。

「・・・ロックした。発射」

小栗は装備するAAM-4を発射した。

殲撃10はハイローミックスで作られたロー機なのでひとたまりもない。

ミサイルはたちまち殲撃10を飲み込んだ。

「タイガー隊はインターセプターを封じました」

「よし。F/A-3を出撃させ、地上攻撃を開始させろ」

「了解。F/A-3ウルフ小队、用意せよ」

あかぎからは新しい戦闘機、F/A-3 3機が発艦準備を開始した。

F/A-3はF-2戦闘機の後継機であるF-3をマルチロール改

修型として開発された最新鋭機で、東日本政府独自の開発である。

配備されて1年であるがすでに性能は保証されている。

F-3制空戦闘機は2021年に実験機心神のデータを元に開発され、価格高騰のF35Aの代用機とされた。

防衛省はF-3の性能を評価し、マルチロール化を打診した。

F/A-3はF-3のシステムを組んでいて80%の部品に互換性がある。

主な改修点是对地攻撃機能の特化である。

防空レーダーを下ろして対地レーダーを積み、武装のJM61A1ではなく独自開発した30?機関砲(27式30mm自動機関砲)を積み、空対空ミサイルは装備せず、

AGMやロケットポッドを装備し、機体下部にはJDAM装備の爆薬を複数装備できる。

「司令、付近で戦闘が!」

「なんだ」

「装甲車が1台吹っ飛びました」

「放っておけ!それより増援はまだか!?」

吉山純太大佐。

元、陸上自衛隊。

彼は離反者である。

「吉山大佐、P R C S 第3航空騎兵隊と連絡が」

吉山は受話器を奪い取った。

「こちらは吉山だ！」

『第3航空騎兵隊、楊中佐であります』

「中佐、早く部隊を連れてこい」

『分かりました』

F/A-18Jは沿岸の道路に仕掛けられた対空ミサイルを潰しにかかった。

HARMによってレーダー波をキャッチ、HARMはそのレーダーをたどってゆき、破壊する。

たちまちに誘導システムを失ったSAMは沈黙させられてしまう。

「こちらタイガーリーダー、道を切り開いた」

『こちらDDAあかぎ、了解。現在F/A-3が向かっている。護衛してくれ』

「了解」

坂崎達レジスタンスはついに市民病院へ達した。

「レジスタンスだ！こちら外周！レジスタンスが大群で押し寄せ」

レジスタンス達は一斉に病院前の詰所を銃撃した。

「病院の最上階が敵の司令室だ！1班、2班、3班は病院を制圧！4班は非常階段で司令室に！」

堀尾と坂崎、新垣とレジスタンス4名は非常階段のある方向へ向かった。

「紗葵！」

坂崎は新垣の呼ぶ意図を理解し、M870の薬室にショットシェルを入れる。

「やって」

坂崎は非常階段を閉ざす扉の錠前を12ゲージでふっ飛ばした。

「ゴー！」

階段をカンカンカン！と金属音を立てながら上る。

「敵だ、坂崎！」

堀尾は上を見上げ、敵の編上げ靴が見えたので叫んだ。

「リョーカイツ！」

坂崎はジャカツと上にショットガンを向け、サイトで狙いをつける。

引き金を絞って12ゲージ弾を撃ち出す。

球体は兵士の足を引き裂き、急所を破壊し体の中心で止まった。

あとは息の無い体がガランガランと、階段を落ちるだけだ。

坂崎達は司令部の外に到着した。

「ぶち破れ」

坂崎はドアに銃を押し当てて撃ち、ぶち破った。

「ええい、下の糞どもをどうにかしろ！部隊を狩り出せ！」

「大佐！そこに敵が－」

ズドンッ、と銃声が響きドアが吹っ飛んだ。

レジスタンスがなだれ込み、警備兵たちも大佐を守ろうと一触即発になる。

「・・・ん？貴様坂崎修一の娘か！？」

吉山は銀に輝く散弾銃を持つ坂崎に気がついた。

「あの男は死んだ！娘もここで死ね！」

吉山が腰から92式手槍（PRCS制式サイドアーム）を出す前に、坂崎はショットガンを撃った。

だが壁になった警備兵3人が吹っ飛んだだけだった。

狭い部屋での銃撃戦は仕掛けたほうが勝つ。

レジスタンス側のほうが早かった。

銃弾で警備兵達はバタバタと倒れていく。

吉山は坂崎が1発目を撃った瞬間に別の出口から逃げていくのが見

えた。

「くそ、坂崎！司令官を追え！」

坂崎が銃撃戦を避けて横からその出口を目指そうとした時だった。

『こちら第3航空騎兵隊。掃射を開始する』

武直・10攻撃ヘリは主砲30？機関砲をホバリングしながら司令部へ撃ち込んだ。

ドンドンドンドンと砲弾が部屋の外壁や天井、床を吹き飛ばす。

坂崎は頭上から落ちてきたコンクリート片を頭にぶつけ、気を失った。

「う．．．が．．．」

私が頭を上げると目の前には3人のPRCS兵が居た。

「レジスタンス、しかも女？フム．．．」

一人のしわがれた声のPRCS兵がフェイスマスクの上から頬をさすり

「ちょうどいい。上等兵、身ぐるみ剥がせ」

呼ばれた若い感じの兵士は

「し、しかしっ軍曹！？」

「なにをしている、はやくしろ！」

その際に私は足元に落ちていたマリンマグナムを拾い上げ、構えた。

「ッ」

軍曹と呼ばれた兵士ともう一人の兵士が銃を構え、引き金に指をかけた。

バン、バンッ！

私は目をつむり、開けた。

そこには二人の兵士を倒したPRCSの上等兵が立っていた。

「え・・・」

「紗葵ああ・・・逃げたと思ったのに」

上等兵はマスクを脱いだ。

「悠一!?!」

紛れもなく、黒鈍悠一だった。

「司令官は上だ!行け!」

悠一が叫ぶ。

私は新垣魅来を起こして二人で階段を登って屋上へ行った。

「なっ!?!」

「そんな!?!?!」

屋上へ登るとすでに大佐はヘリに乗りうつしているところだった。

「まてえええ!」

私はM9を構えて大佐を撃った。

弾はヘリに当たって弾痕を残すだけだ。

ヘリは上空へ行き、すでに弾は届かない。

「クソッ!!!」

私は悪態をついた。

のがしてしまった。

「紗葵ッ！下、やばい！！！」

魅来が屋上ヘリポートの縁から下を覗いている。

「どうしたの！？」

「戦車が・・・！」

下を覗くとPRCSの陸戦車両が迫ってきていた。

先ほど私たちを攻撃した戦闘ヘリや輸送ヘリも10機近く迫っている。

「逃げ場もない、どうするん・・・だ」

私と魅来は死を覚悟した。

そしてヘリが落ちるのを見た。

『！っ？』

『こちら攻勢1、ミサイル攻撃を受け。』

『こちらキャリー10！攻撃を。』

そして吉山大佐の乗る機にも

「ふう、早く空域を脱せ！私は再び指揮をとる！」

吉山が座席にふんぞり返ろうとした時だった。

機体は爆発音と共に大きく揺れ、くるくると回り始めた。

「どうなっておる！？」

コックピットはなかった。

彼の乗るMi-8のコックピットは綺麗サッパリ消えていた。

「なんで操縦室がッ！？！？」

ヘリは無様に地面へたたきつけられ、爆発した。

「なんでヘリが落ち・・・！」

坂崎はある音を聞いた。

「ジェット機!?!」

「タイガーリーダーより全機。この空域に居るのは全て敵だ! 撃ち落せ!」

『Copy!』

F/A-18Jは機銃や空対空ミサイルを撃ちまくりながら司令部上空を通過した。

「1機撃破!」

「落ちろハエ!」

などと隊員たちは一方的な撃墜劇を楽しんだ。

「こちらウルフ小隊の飯島2等空佐です。残しておいてくださいよ!」

『こちらタイガー小隊の小栗だ。テメエらは地上目標だろうが。全部ぶっ壊せ』

F/A-3 3機は低速で市内に侵入した。

「ウルフリーダーより全機へ。レーダーに戦車を捉えた。撃て」

誘導ミサイルと無誘導ロケット弾が司令部前に集まる戦車部隊に襲いかかる。

『火車1より全車両へ！敵航空部隊が我々を狙っている！至急、退避せよ！』

戦車から兵士たちが逃げる。

ロケット弾はもぬけの殻の戦車を吹き飛ばしていく。

「やってるやってる。こちらガンスリンガー1。空域での友軍機による攻撃が開始された模様」

『こちらSSF1。へりは敵司令部へ下ろす』

「了解、SSF1。支援する」

AOH-1サムライは小ぶりの機体を素早く動かして市民病院前のコースに突入した。

タンDEMコックピットのガンナー席の隊員がサーマルゴーグルで敵の位置を素早く発見する。

「敵発見。発射」

ガンカメラの映像を通し、30?機関砲を撃つ。

UH-1Yヴェノムは坂崎と新垣の居るヘリポート上空でホバリングし、ロープを下ろして降下を開始した。

兵士たちは二人を無視して院内へ突入していく。

最後に降りてきた兵士は40歳くらいの兵士で、二人を見ると話しかけてきた。

「レジスタンスかい？」

「え、ええ、そうです」

坂崎が生返事をする、彼は手を出して

「我々は東日本陸上自衛隊、特殊調査部隊SSFのものだ。私は片山直人。君は？」

坂崎は答える。

「坂崎紗葵です。彼女は新垣魅来」

坂崎の名前を聞いた途端、片山は驚いた顔をした。

「君が、坂崎隊長の娘・・・？なるほど、さすが娘だ。勇敢だ」

片山は一人で納得し

「とにかく、一緒に来てくれ。下で温かいものをだそう」

司令室を通るとそこには結束バンドで拘束された悠一がいた。

「ああ、片山2佐。PRCSの兵隊を一人捉えました。少年兵です」

「移送して尋問しろ」

坂崎はその言葉を聞いて片山に言った。

「彼は私をたすけてくれたんです！」

「何？」

「彼は自分の上官と仲間を撃って私をたすけてくれたんです！だから離してあげてください！」

片山はわかったといって目配せして拘束具を解かせた。

「殲撃10を2機失った上、一宮の拠点を落とされるとは・・・ッ！」

「陸軍も痛手を負いました。新型機のWZ-10を失いました」

「ふん・・・まあ、いい。敵規模がわかればすぐさま名古屋から殲撃10の編隊を送れるというに」

「そういえばあんな大量のSF-Z-4をどうするつもりです」

「あの薬はすでに致死薬になったのだろう」

「ええ、まあ」

「ならば使うまで」

「し、しかしあれの致死性は・・・！」

「構わん。レジスタンスや東の人間にこれ以上領土を踏ませるか！」

PRCS ATTACK

「本日、日本国陸上自衛隊は日本中央部のPRCS侵略軍を攻撃しました。レジスタンスと協力して行われた作戦は成功し、一部地域を奪回した模様です」

私と悠一は自衛隊の野営陣地にはいった。

「かけてくれ」

片山2佐の指示で私と悠一はイスに座る。

「それで・・・と・・・坂崎くん。君のお父さんにはお世話になったから、とりあえず生活待遇は優遇出来るだろう。東日本へすぐに移送するから」

「ダメなんです!」

「・・・?」

私は思わず叫んでいた。

「ダメ、何です。お母さんが捕まっているから・・・」

「・・・聞かせて」

「お母さんは・・・」

- 2028年10月5日愛知県避難民キャンプ -

「PRCSだ！逃げろ！！！」

あれは2年前、難民キャンプにPRCSの機動部隊が侵入してきた。

「我々は中華人民共和国連邦陸軍である！ココから逃げることは反逆者をしめす！」

機動輸送車に取り付けられた重機関銃が人々をなぎ倒した。

私はお母さんに突き飛ばされた。

「え！？」

「紗葵、逃げなさい」

「そんな、私お母さんと・・・！」

「あなたはもう16歳なの！大人！いきていけるわ・・・」

お母さんは私を物置に押し込んで閉めた。

その時間こえた声がある。

「動くな！」

「動かないわよ・・・」

「・・・！？黒い紳士の・・・女だと！？」

「ちょ、返しなさいよ！」

「連行しろ！・・・こいつには借りがあるッ！」

ドガッ！

「あぐっ・・・」

「沖縄では痛い目を見たからな！連れて行け！」

「ふむ・・・」

私があらかた説明をすると片山2佐は

「凜さんが捕らえられている場所はまだわからないから情報は集める。君はお母さんが見つかるまでここに。」

「私は、敗残兵を狩りに行きます」

「・・・冗談だろう、君は。」

「私は、兵士です。一人前ではないかもしれませんが、兵士です」
片山2佐はため息を付き

「正義感の強さはお父さん譲りだなあ、全く。いいだろう。レジスタンス部隊は先ほど、堀尾指揮官の決定で東日本陸上自衛隊の義勇軍という形になった。だが、まずは地域にいる

敵司令官の排除を優先する。ちょうど、元PRCSの兵士も居るようだしな」

と、悠一の方を向いて笑った。

「実は敵の基地にある娼館で動きがあった。どうやら高級将校が逮捕したハッカーを連れてそこに行ったらしい。君たちにはハッカーの奪還と高級将校の暗殺を頼みたい」

「素性はわからないんですか？そのハッカーの」

「ハンドルネームはサイバーピーチ、年齢は君たちと同年と聞いているよ」

片山2佐は続けて

「あの施設は娼館がある軍基地でそこまで警備は厳しくない。只中はPRCSの兵士と娼婦しか入れない。そこは工夫して欲しい。」

坂崎くんは捕虜のふりを、黒鉈くんはPRCS兵をやってくれ。高級将校の殺害後援護部隊を送る。頑張ってくれ」

- 1時間後、5月10日：午後10時02分：PRCS軍分屯地：
天候・雷雨 -

「こちら坂崎。潜入しました」

『こちらは七咲優希3等陸尉です。あなた達のバックアップを任せました。よろしくね、坂崎さん』

「はい。それでどうすればいいですか？」

『高級将校は基地中央の娼館、2Fの隅の部屋に滞在していることがUAV偵察機で判明しました。あなた達は誰にもバレずにそこへ突入し、中の将校を殺害してハッカーを助けだしてもらいます』

「ハッカーをすくい出したら？」

『はい。私を無線で呼んでください。無線がつかない場合はペランダから空に手を振ってください。UAVが捕らえます』

「わかりました」

『では、幸運を』

「上等兵、その女は？」

「ハッ、市街地で治安部隊が拘束したところを引き取りここへ連れてきました！中佐殿の書類も持って参りました！」

「・・・よし、ではその女はB棟へ連れて行け。くれぐれも娼館には立ち寄るなよ？」

門番の軍曹が入出許可書にサインをして黒錠に手渡した。

「なぜです？」

軍曹は無精髭をさすって腰から中国産タバコを出して黒錠に勧め

「いえ、自分は未成年ですので」

「PRCS法じゃ認可されてるが、まあ健康考えればそうだな」

と、軍曹は黒錠に差し出した手を引っ込めて煙草を箱から1本出して火を着けた。

「今日はお偉いさんが来てるんだ。こんなちっぽけな基地にな・・・」

「誰なんです？」

「お前が知ることじゃない。だが、その女みたいな若い娘が好みで・・・そういえば女を連れて入っていったな。近寄るなよ。護衛部の連中も一宮が落ちたことで殺気立ってる」

「そういえばさ」

「なあに？」

悠一が話を切り出してきた。

「メガネ、かけてないけどコンタクトにしたの？」

「えっ、ああ・・・うん。砂埃とかレンズに吹きかかって邪魔だったから・・・」

「髪も伸びた」

「切る場所もないから・・・。メガネで短髪のほうが好き・・・？」

悠一はニコつと笑って

「長くて、メガネのないほうが好きだよ。目、ぱっちりしてて髪も可愛いよ」

2年近くこんな事言われてなかった。

耐性がなくなっていた私は顔が真っ赤になってひどい動悸になった。

「ああ・・・もう、突然やめて」

「かわいいなあ」

「おいおい、その年で娼婦を連れてるのか？上等兵」

「え、ええ！まあ！」

「何をしたか知らんが・・・2Fには入るなよ？護衛部隊が階段に詰めててすごくキナクセエ」

娼館の入り口で番兵の曹長に止められ、2Fへは行くなと通告を受けた。

「2Fに誰か居るんですか？」

「あれ？お前入り口のおしゃべりパペット軍曹と喋らなかったのか？まあ、いいや。今日来てるのは東海方面隊司令官のり・ルンジュン中将だ。あのエロオヤジ、途中で捕まえた捕虜が美人なもんだから

ここにきたんだよ。本来なら名古屋に戻ってたはずなのによ。一宮の吉山が死んで、対策会議に呼ばれた帰りにきたって話だ。そういえばまだもう一人娼婦を呼ぶとか言ってたなあ・・・」

曹長がああ、いかんいかんと顔を振り

「あまりハメを外すナよ？」

「2Fへの通行は許されん。立ち去れ、上等兵」

黒鉈は護衛部の中尉に

「実は2Fにいる人物に呼ばれたと、この娼婦が申し立てましてお連れしました」

「・・・ふむ、そういえば一人娼婦が・・・よし。上等兵、貴様は銃を預けて行け」

「了解」

黒鉈は拳銃をボックスに入れた。

「2Fの隅っこだ。くれぐれも無礼の無いようにな」

「ちょっと、私娼婦じゃないわよ」

「わかってる・・・もしかして、俺以外に・・・」

「・・・ちゃんと貞潔は守ってるわよ！・・・もう」

坂崎が顔を赤に染めながら喚く。

「・・・ついた。頃合いを見て突入する。そうだな、5分後でいい？」

「・・・了解」

坂崎はコンコンと扉を叩く前に中から喘ぎ声と男と女のすえた匂いがするのに気づいた。

「・・・」

拳を握りしめ、扉を叩いた。

喘ぎ声が止まり、足音が聞こえてきた。

「・・・誰だ」

「呼ばれた娼婦よ。開けて」

「・・・よし」

ガチャンと鍵が開き、ドアに立っていたのは脂ぎった汗をかいた小太りのハゲ散らかした男だった。

「ヒヒ・・・若いね・・・ま、待ってなさい」

少し癖のある日本語を操る男は部屋の奥に戻っていった。

「なにしてる、来なさい」

坂崎は男について部屋の奥に入ると男と女のかさなっていた匂いが一層ひどくなり、気持ちが悪くなった。

部屋には大きなベッドがあり、そこには全裸の女が一人。

（あれがハッカー・・・？）

女は男が来ると

「ねえ、もう一回しましょう」

と誘い

「俺はまだイッてないんだ。イクまでやるさ」

と、男は突然性器を女の性器へ挿入し、腰を動かし始めた。

「・・・ッ」

部屋を見渡す。

ベッドの下には娼婦の服が乱雑に脱ぎ捨てられていてその隣にはP
RCSの緑の正装軍服。

テーブルには高級将校がつけるのを許される軍帽と将校用の拳銃。

部屋の隅を見ると頭から黒の袋を被せられた人がいた。

坂崎はそそつと近寄り

「あなたがハッカー？心配しないで。助けに来た。喋らないでハッ
カーならうなずいて」

黒の袋は縦に動いた。

「・・・時間を見て助けるから、少し頑張って」

「ああ、いくう！」

「っああ・・・！！！！！！」

ベッドの上では男と女が行為を終え、放心した様子だった。

坂崎は立ち上がり、テーブルの上の拳銃を手にとった。

先ほどから雷が落ちていて拳銃の音には気付かれないはずだ。

坂崎は雷鳴と同時に男の背中を撃った。

弾は貫通して娼婦の胸を貫いた。

「・・・仕方ないのよ」

銃をしまったときに扉が開いて黒鎧が入ってきた。

「全然わからなかった。ばれないね、多分。ハッカーは？もしかしてそのベッドで死んでるのが？」

「違う、あっち」

坂崎は黒い袋をとってあげた。

「もう、なんなのよなんなの！？体はベタベタ触られるしキモい臭いと喘ぎ声に・・・イッ」

袋から顔を出したのはかなり美人の女だったが、坂崎を見るなり体をこわばらせた。

「あ・・・あああああ！?!?!?!」

そしておしりを床につけたままバックで逃げる

「ああ、あんた生きて・・・!?!」

坂崎は顔に見覚えがなかったので

「あの、あったことありました？」

女はゆっくり答える。

「アンタに人生を壊された、吉山桃華よ！覚えてないの!?!」

坂崎は背筋が凍った。

「え・・・あ・・・」

顔は大人びすぎててわからなかった。

「でも・・・あなたのお父さんは・・・一宮支部司令官で・・・」

吉山桃華は唾を吐き捨て

「あの親父は私を売ったのよ。中国軍の士官に！自分がPRCSで優位な立場を築こうと！私は売られた後に逃げたわ。それで今は反政府活動のサイバーハッカー、ピーチ様」

「・・・あなたのお父さんは死んだわ」

「知ってる。ヘリで爆死でしょう？聞いた。せいせいしたわ。・・・それで、私も殺す？」

坂崎は首に手を当てて無線を起動した。

「こちら坂崎。パッケージ確保。援護を要請します。オーバー」

『こちら七咲です。わかりました。待っててくださいね』

- 基地より西に3km、山中 -

「ミッションゴー、ゴーだ！」

ヘリがバタバタと音を立て、空に舞い上がった。

数は4機。

UH-60が2機にAOH-1サムライが2機。

A O H - 1 のパイロットはナイトビジョンをオンにした。

「こちらガンスリンガー 1 - 1。マスターアーム起動」

『こちら 1 - 2、了解』

『こちらガンスリンガー 2 - 1、こちらでも起動』

『2 - 2 了解』

『こちらウォーリアー 1。可視可能範囲に敵はない』

『ウォーリアー 2、了解』

ガンスリンガー 1 - 1 パイロットは後ろの席のガンナーに命令を出した。

「ガンスリンガー 1 - 2、TADS 起動（火器管制用システム）」

『了解、起動。視界クリア』

ガンスリンガー 1 - 1 パイロットは周波数を変えて

「・・・ガンスリンガー 1 - 1 よりホテル 9 - 9（指令本部）」

『こちらホテル 9 - 9』

「自由射撃可能か？」

『いや、目標チャーリービルへの射撃は禁止とする。パッケージと隊員がいる』

「了解」

- 分屯基地 本部 -

「ん・・・雷雨でレーダーが乱れるな」

「どうした？」

「見てくれ。機影がこんなに。居る筈もない」

「そうだな・・・修理しないとダメか」

A O H - 1 は視界に指令本部を捉えた。

雷音でローター音は聞こえない。

「ガンスリンガー1 - 1 からガンスリンガー2 - 1」

『こちらガンスリンガー2 - 1』

「目標を捉えたか？」

『捉えている。攻撃するか？』

「ああ、ヘルファイアの用意を2・2に伝えてくれ」

『了解』

ガンスリンガー1・1のパイロットは後部座席の隊員に指示を出す。

「1・2、ヘルファイアミサイルを頼む。ターゲットペイント（レーザー目標指示）は俺がやる」

『了解』

「ガンスリンガー1・1より全機！攻撃を開始！！！」

A O H - 1 サムライ2機はスタブウィングに取り付けられたA G M - 114 ヘルファイアミサイルを発射した。

ミサイルは司令部の中核である2Fをぶち破った。

「敵の襲撃だ！くそ！」

「いけ、いけええ！」

爆発音の後、外が騒がしくなった。

廊下の奥から人がドタバタと走ってくる音が聞こえる。

「ッ、来るぞ！紗葵、外へ出る用意を。俺が食い止める」

悠一は将校用の拳銃を持って外に出てしまった。

「悠一っ！？」

バン！バン！バンッ！

銃声が反響する。

「アンタ、アイツ死んでもいいの？」

吉山桃華は私の胸ぐらを掴んで言った。

「私はアンタにひどい事をしたわ。そしてアンタも私の人生をめちゃめちゃにした。でも、アンタには感謝してるわ」

「え」

「アンタが私を止めなければ、私は壊れてた。アンタが壊してくれたから、私は中国軍の士官から逃げてハッカーになった。壊れていなければ」

悲運なお嬢様として中国人の子をはらまされて肉便器よ！」

「肉便器ッてちょっと！？」

「これ使いなさい、銃！」

吉山桃華が私に手渡したのはシグザウエルMOSQUITO。

「これ、何処で・・・」

「いいから、行け！ボケエ！」

「え、紗葵なんでっ!？」

「援護する!」

私はMOSQUITOを構え、黒服の護衛部の兵士の一人に狙いをつけた。

引き金を引くと、電撃弾が発射され、隊員の胸にあたって電気ショックを与えた。

「うがああああ!？」

「ナイス！うまい！」

悠一は拳銃の弾を補充して障害物から頭を出して撃った。

『ウォーリアー1よりホテル9-9』

『こちらホテル9-9、どうぞ』

『これより目標チャーリーへ突入する』

『了解。作戦開始』

UH-60 2機はファストロープを開始した。

キャビンからロープが落とされ、SSFの精鋭がロープに捕まって素早く降りる。

「こちらカリバー1-1、降下完了」

『ウォーリアー1、降下確認。一時空域を離脱』

「こちらカリバー2-1、降下完了」

『ウォーリアー2、降下確認。空域を離脱』

6人の隊員は17式5.56?カービン（折りたたみ式ストック）のセイフティを外し、Eotechホログラフィックサイトのスイッチを入れた。

「カリバー2は現状待機。カリバー1は降下し、2Fのパッケージを確保する」

カリバー1チームは屋上にロープを固定してラペリングを行った。

カラビナがカチカチと音を立てる。

黒のドーランを塗ったカリバー1-1が合図を送ってスタングレネ

ードを部屋に入れた。

私がMOSQUITOの弾を補充しようとした時、窓が破れて円筒状の物が転がり込んだ。

「フラッシュバン！」

悠一が障害物の陰へ私を押し倒して覆いかぶさった。

バアアーン！という爆発音とキイーンという耳鳴りがし、物が聞こえなくなった。

起き上がるとそこには黒の戦闘服を着た特殊部隊が3人ほど武器を持って立っている。

「我々は特殊調査隊、SSFの者です。ハッカーは？」

「ここよ、はあ。早く連れだして」

吉山桃華は頭をボリボリ掻きながら部屋から出てきた。

隊長格の隊員は耳のヘッドセットに指をやって

「こちらカリバー1-1、パッケージ確保。これより当該域を離脱する」

無線を切ると全員に

「これより撤収します。こちらへ」

屋上にはUH-60 2機が地面より数センチ浮かせてホバリングしていた。

「どうぞ、中へ！」

へりは飛び上がり、何事もなかったかのように飛びさってしまった。

「何？ああ、クソ。リ・ルンジュンが死んだ？」

「はい、先ほど基地が東日本陸上自衛隊に襲撃され殺害されました」

「で、俺が代わりに指揮を執れというのか」

「はい、伊波中佐」

「・・・ハア。俺より階級高い奴は」

「いえ、居りません。一宮支部の吉山大佐は戦死されました」

「・・・分かった。引き受ける」

『は、ではそのように通達を』

男は電話を切った。

「・・・ハア」

ただため息を付く。

「浮かない顔をして、どうなされましたか」

「ああ、チャン大尉。それが困ったんだ」

チャン大尉はほう、という

「どのように？」

「実はエロオヤジのリ・ルンジュンが暗殺されたいらしい」

「ほう・・・」

「それで俺が指揮を・・・」

チャン大尉は笑い

「勝てばよろしいのです」

「勝てるわけ無いだろう！東は近以下に近代化を重ねている。本国直送の20式戦車が届かなければ無理だ」

「・・・一つ、手があります」

チャン大尉は書類を出して伊波中佐に手渡す。

「これは？」

チャン大尉は答えた。

「SF-Z-4、本国で開発され、日本で改良された致死ガスです。これは爆撃機に搭載できますので効果てきめんかと」

伊波中佐は驚き

「し、しかしそれは虐殺に・・・」

「背に腹は代えられないでしょう。私は空軍に知り合いがいますから、都合付けさせます」

「・・・分かった。チャン大尉、頼んだ」

チャンは携帯を取り出してジユウ・ヤンソク空軍中佐に電話をかけた。

「ジユウ中佐ですか、チャンです」

『ああ、どうした』

「折り入って相談ですが、Tu-95を貸していただけませんか」

『ああ、もしかしてSF・Zなんかを使うのか』

「ハイ、そうです」

『よし、分かった。早速積ませるから来い』

「ありがとうございます」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4088z/>

BestLife

2011年12月31日05時46分発行